
ワン魂（ワンピース＆銀魂）

近衛 陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワン魂（ワンピース&銀魂）

【Nコード】

N0080R

【作者名】

近衛 陸

【あらすじ】

ワンピースの世界に銀時、神楽、駄眼鏡（新八）がやってきた。シリアス有り笑い有りの海賊物語が始まる（アラバスタ編が終わった辺りからです）

必読って必要？

はい、初めての方もお馴染みの方も閲覧ありがとうございます。
この小説の作者の近衛陸と申すものです。

今回は2つ目のコラボ小説を書くことになりました。

っと、いうわけで毎度お馴染み新八くん、挨拶と内容をどうぞ！！

新「え？ちょ…僕？挨拶なんていきなりそんなこと言われても……

こ、この話は僕たち万事屋メンバーがワンピースの世界に行って大冒険する小説だそうです。僕たちは……」

はい、そこまで！！ちなみに新八は活躍しません！！（笑）

新「ええええ！！」

いや、そんな驚かれても…嘘だから…一応活躍するから米1粒くらい

新「そうですか。活躍するって…米粒ウウウ！？」

もちろん！！それではワンピース&銀魂略してワン魂始まります！！

プロローグ（前書き）

プロローグです。今回の異世界への行き方は尊敬してやまない「銀魂のごとく」伽藍さまより許可をもらい書きました。

伽藍さま、本当にありがとうございます。

それでは、始めます

プロローグ

真つ暗な暗闇の中、一筋の光が三人を浮き上がらせる。この三人とは毎度お馴染み万事屋銀ちゃんメンバー。坂田銀時、神楽、志村新八だ。

「目覚めよ。選ばれし者ども…秘めし内なる力。解放する時が来たのだ。そつとひらけその目を…その閉じられた限界への扉を…目覚めよ」

どこからともなく声が聞こえる。どうやら光の中から聞こえるようだ。その声が目覚めよつと再度言つと三人の内一人がムクツと起き上がった。メガネを掛けた少年だ。

「……どこですか？ここ」

新八はキョロキョロと辺りを見渡す。しかし光は消えており暗くて何も見えない。見えるのは隣にいる銀時と神楽だけ。

「銀さん、起きて下さい。なんか真つ暗なんですけど」

新八は不思議に思い銀時を起こそうと体を揺らした。すると銀髪の青年、銀時は身じろぎだす。

「ん…あ？あ…夢だろ。夢」

「夢…そうですね」

目をそつと開いた銀時は真つ暗なのを見てきつぱりと言い、二度寝を始めた。新八も銀時の言葉に頷くとその場で再度寝始めた。しばらくすると再度光が現れ声が聞こえる。

「目覚めよ。目覚めよ…選ばれし者どもよ。……ちょ、一回でいいんで起きてくれませんか？」

しかし三人は熟睡していた。何度呼んでも、お願いしても起きそうにない。しびれを切らしとうとう光から何かが出てきた。

「起きろオオオ！！テメエ等早く起きろやコラアアア！！」

光から出てきた白いヒゲを携えたオッサンが三人に向かって大声で叫んだ。

「な、なんだ！？」

「うわあつ…アレ？なんか見たことある」

「んう…何アルか？」

その声により三人は飛び起きた。

「やっと、起きたか…久しぶりだな。坂田銀時、相変わらず我が主は異空間で二度寝とは危機感が足りないな」

ヒゲのオッサンはきつぱりと言った。三人は久しぶりと言う言葉に首を傾げた。

「あー…誰？…い、いや…お…お久しぶりです…」

とりあえず銀時がオッサンに挨拶をし、すぐさま万事屋三人で集まった。

「オイオイ、誰？アレ誰だよ」

「え？知りませんよ。銀さんの知り合いじゃないんですか？」

「適当に合わせたんだよ。…お前覚えてないの？さっき見たことあるって言ってたじゃん」

「いや、それが全く分からなくて…神楽ちゃんは？」

銀時と新八はヒソヒソと話ながら神楽に聞いた。

「あんな全身タイツしってても知らない振りするアル」

「バカ。大きな声出すんじゃないやねえよ！！聞こえるだろ」

銀時が神楽に言うがもう遅い。オッサンは恥ずかしさで顔を微かに染めている。どうやらヒソヒソ声は筒抜けだったようだ。

「とりあえず名前を聞いてみたら思い出すかもしれませんよ」

新八の提案に銀時はブンブンと首を振った。

「ムリムリムリ、あんな知り合い顔で出てきたのにどちら様なんて言えるかよ。赤っ恥もいいところだろ」

「じゃあ、どうするんですか！！このままってのはすごい空気重い

んですけど」

だんだんと銀時と新八の声は大きくなる。もうすでにヒソヒソ声ではない。そのとき、ヒゲのオッサンが咳をし始めた。

「ゴホッ…仙人ゲホッゲホッ」

どうやら、咳に混じってヒントをくれているようだ。

「ゲホッゴホゴホッせ、仙人？何ゲホッ」

銀時も相手に合わせて咳に混じらせて聞いた。

「ゲホッゴホッと、洞爺湖ゲホッゲホッ仙人ゴホッ」

「ゴホゴホッ洞爺湖仙人？ゲホッ」

「ゲホッそ、そうゲホッ」

「ゴホッゴホッ洞爺湖仙人でオーケーゲホッ」

「オーケーゲホッ」

「うるせえよお前ら！！もう普通にしゃべろや！！しかも最後のゲホッって語尾みてえになってんじゃん！！」

あまりの咳の応酬に新八が突っ込んだ。

銀時は咳をやめるとうんうん頷く。

「あー…ハイハイ。洞爺湖仙人な、うん。……やべえよ、洞爺湖仙

人って誰？」

どうやら名前を聞いても分からなかったようだ。突っ込み終えた新八にボソツと聞く。しかし新八に知らないと言を振られた。そんな様子を見たオッサンもとい洞爺湖仙人がキレた。

「結局皆目覚えておらんではないかアアアア！お前達に必殺技を授けに来た洞爺湖仙人であろうがアアアア！ももパーンを忘れたのか！！」

「あー…あつた。あつた。銀さん嫌なことは忘れようとするからよオ」

どうやらももパーンで思い出したようだ。銀時が悪気もなく言った。

「そ、それであの…その仙人が僕らに何の用ですか？」

銀時の言葉に苦笑いを浮かべながら新八が聞いた。新八の言葉に仙人はよくぞ聞いたと言うよう咳払いをした。

「もちろん、我が主。坂田銀時とお前たちを修行させるために来た」

「修行…ですか？」

「またももパーンアルか？」

新八と神楽が聞き返すように言う。銀時は怪しそうに洞爺湖仙人を見つめた。

「いや、今回はある人たちの協力のもと、ある場所に行き修行を行

うことになっている。紹介しよう、協力者ジャンプの編集長とジャンプのマークだ」

「「えええええ！！？？」」

「誰アルか？」

洞爺湖仙人の出して来た協力者の名前の凄さに驚く銀時と新八。神楽は分かってないようだ。

「お前ら三人は時期編集長の俺と現編集長、ジャンプマークの力で他のジャンプ漫画へも行ってもらっ」

「え？マジですか！！ってかあんたサブキャラのくせに何編集長の座を狙ってるんですか！！」

洞爺湖の言葉に新八が突っ込んだ。そんな様子を見ながら神楽は眉を寄せた。

「よく分からないけどどこか行くアルか？ねえ銀ちゃ……銀ちゃん？」

神楽は話掛けると銀時はプルプルと震えていた。目も珍しくキラキラと輝いている。

「オイ、洞爺湖仙人さんよオ。ジャンプ漫画ならどこでも行けたりするのか？」

じつと何かを期待するように洞爺湖仙人を見つめ返事を待つ。

「ああ、ジャンプ漫画ならどこでも修行できそうだからな。どうした？銀時よ。行きたい漫画でもあるのか？」

「ああ、ド、ドラゴン。ールの漫画に行きてえ」

少し緊張気味に言う銀時に洞爺湖仙人は頷いた。そして飛ばそうと手をあげた瞬間新八が止めた。

「ま、待って下さい！！銀さんドラゴン。ールはあまりにも危険過ぎます！！」

「あ？危険？」

「そうですよ！！戦闘能力が違い過ぎます！！瞬殺ですよ！！瞬殺」

新八の言葉に銀時は眉を寄せた。

「うつせえ。俺は武天老。様のもとでかめはめ波を習っただよ！！」

「いやいやいや、かめはめ波ってあんたまだ諦めてなかったんかい！！」

「誰が諦めるかアアアア！！男の夢だぞ！！夢！！」

銀時は夢を語りキラキラと瞳を輝かせる。そんな銀時を止めようとする新八。この言い争いは長くなりそうだ。

そのとき、どこからともなく声がした。

「洞爺湖仙人くん、今日も例の場所に行くかい？」

「あ、もちろん行きます行きます」

「分かったよ。じゃあ、いつもの娘指名しとくよ。早く来てね」

銀時と新八は言い争いをやめじつと洞爺湖仙人を見つめた。神楽も白い目で洞爺湖仙人を見ている。

「さて、私は急用が出来たので急がなくてはならない」

「いやいやいや、急用ってキャバクラだよね!!」

新八の言葉に洞爺湖仙人はゴホッゴホッと咳をした。

「いや、違う。風邪…風邪引いたから病院行くだけだ」

「いやいやいや、そんな誤魔化さなくても僕たち聞いちゃったから!!」

「いや、違う。とりあえず忙しいからドラゴン。ールの世界に送る」

洞爺湖仙人は新八の言葉にきっぱり否定をし、パチンと指を弾いた。すると三人は光に包まれそして消えた。

「坂田銀時にその仲間たち、頑張れよ。さて、早く店に行かなくて……あつ、送る世界間違えた」

第1訓 微調整って意外と難しいよね？（前書き）

すいませーん。オリキャラあまり出さない予定だったんですけど

初っ端から……予定は予定でしかないと言っことですね

第1訓 微調整って意外と難しいよね？

「ん…どこだここ？つてかせまつ！！」

銀時は目を覚ました辺りは薄暗く、とっても狭い。それもそのはず銀時を含む三人は1つのタルに入れられているのだ。銀時は両隣にいる新八と神樂を起こそうと声をかけた。

「おーい、お前ら起きろ。」

その呼びかけに新八は起きる。

「あれ？…ここどこですか？つてせまつ！！！」

新八は起きたようだ。しかし神樂は起きそうにない。銀時は仕方なさそうに神樂の方を向き身体を揺さぶった。狭い場所なので相手の方を向くとほんと顔が近い。顔と顔の間は十センチぐらい、その距離で声をかけながら身体を揺さぶる。

「ん？何ア……」

神樂は起きると言葉を失った。薄暗くてハッキリとは見えないが銀時の顔が間近にあるのだ。

「いやアアア！夜這い夜這いネ！！男は皆狼って言うてたことはほんとだったアルウウウ」

神樂は狭い中ジタバタと暴れる。タルはガタガタと勢いよく揺れた。銀時は神樂を落ち着かせようと両手首を掴んだ。

「落ち着けえええ！！誰もお前なんか襲わねえよ」

「嘘ヨ！！銀ちゃんのセクハルハラスントオオオ！！」

「それを言うならセクシャルハラスメントだろうがアアア！！」

神楽の言葉に銀時は叫んだ。二人はガタガタと動きだす。

「ちょ…二人とも落ち着いて下さい！！狭いんですから」

新八が止めようとすると上から光が…どうやらタルのフタが開いたようだ。三人は一斉に光の方を見た。いかついオッサンが覗いていた。

「がっはははっ！！いやー、兄ちゃんそれはダメだろ。俺たち海賊でもいたいけな少女を襲わないぜ」

偉そうに椅子に腰かけた変なヒゲを携えたいかにも海賊船長みたいな服を着た男が笑いながら言った。どうやら銀時たちが入っていたタルがあつたのは海賊船の倉庫の中。

部下Aが倉庫の騒がしさに気付き銀時たちを見つけたのだ。そして今、この船の船長らしき人物の前に並んで立っている。

「オイオイオイ、ここどこだよ？武天老。様は？海賊？え？ドラゴン。ールだよな？」

銀時はひそひそと新八に言った。

「銀さん落ち着いてください。よく分からないですけど…ドラゴン。ールの世界の海賊達じゃないですか？」

「マジでか。なんだよアイツ、普通主人公のそこ連れて行くだろう。マジ使えねえなア」

銀時は新八の言葉に眉を寄せて洞爺湖仙人に悪態をつく。

新八はそんな銀時を見て苦笑いを浮かべる。神楽は何故かいかにも船長のような服を着た男を見ていた。

「ねえ、銀ちゃん。銀ちゃん」

神楽は銀時の服を引っ張った。

「あ？なんだよ。」

銀時は眉を寄せて神楽を見つめる。

「銀ちゃん、あの人あんないかにもな船長服着てて恥ずかしくないアルか？私なら絶対嫌ヨ」

神楽は船長らしき男を指差して言った。笑い声が止まり辺りはシーンと静まり返る。船長らしき男は口元をひくつかせた。

「神楽何言つてんだ！！ちょ…すいませーん。この子田舎者なもんで許して下さい」

銀時は船長らしき男にお辞儀をし神楽を連れて歩きながら言った。

「バカっ！！お前いい加減にしろよ。アレはなア。存在感の無さを自覚して服だけでも存在しようという知恵なんだよ！！」

銀時がきつぱりと言うと新八が突っ込んだ。

「そんなわけないだろオオオ！！ファッションだ！！ファッションンンっ！！すいませーん、こいつらきちんと躡しときますんで」

新八がぺこぺこと謝った。海賊の部下達は殺気立っている。そんな海賊達を気にせず神楽と銀時は再度口を開いた。

「銀ちゃーん。アレ、ファッションって言ってるアルよ」

「んなわけねえだろ。こんなダサいのにファッションだなんて違いますよねえ？」

「え？」

銀時は船長らしき男に話し掛けた。男は戸惑っている。

「え？ま、まさか」

銀時がわざとらしく嘘だろっというような顔をした。男は照れたように口を開いた。

「ち、ちげえし！！ファッション？何言ってるの？これはアレだよ。アレ。なんかこう…適当にあるもの着たらこうなったみたいなの…」

男はモゴモゴと喋りだした。
そんな船長を見て部下達は叫ぶ。

「船長オオオ!!」

「大丈夫です!!その服格好良いですって」

「いや、格好良いとか悪いとか意識してないしィ… たまたまだから!!もうこんな服着てられねえよ」

服を脱ぎ捨てどこからか出したハサミで服を切り刻み始めた。
部下達はそんな船長を見て慌てる。

「船長、やめて下さい!!ほんと大丈夫ですから」

部下の一人が船長らしき男の肩に手を置いた。

「うるせエエエ!!お前の服も切り刻んでやるよオオオ!!」

船長らしき男は部下に殴りかかって行った。

「ギャアアア!!」

「船長がご乱心したアアア!!」

「や、やめてくれエエエ!!」

辺りには部下たちの叫び声が響く。まさに地獄絵図だ。そんな光景を見て新八は冷や汗をかいた。

「ぎ、銀さん？これ良いんですか？なんか凄いことになってるんですけど…」

「あ？いいんじゃない？それより武天老。様のところにはどうやって行けるか考えるほうが大事だし」

「いやいやいや、それはあんた以外大事じゃねえよ」

新八がそう呟いた途端、頭の中で何やら声が聞こえた。テレパシーというやつだろうか。

（銀時、我が主銀時よ）

「あ？」

「銀ちゃん、なんか嫌㊿。頭の中で声がするアル」

銀時は眉を寄せた。神楽は嫌そうに顔をしかめる。

（我だ、洞爺湖だ。銀時よ。異世界はどうだ？楽しんでいるか？お前らももう気づいているだろうが…送る場所が少しズレた。）

「確かに、主人公居ませんしねえ」

新八が洞爺湖の言葉に頷く。

（うむ、お前らには謝らなくてはなるまい。まさかドラゴン。ールと間違えてワンピースの世界に送るとは…）

「待てエエエ！…どこが少しいい！…世界が違っじゃないですか

「アアアア!!」

（いやア、あれだ。急いでたら微調整が狂ってしまつて（笑））

「（笑）じゃねえよ!!こっちは笑えねえんだよ!!」

新八が叫ぶと頭の中にもう一つ声が聞こえた。

（洞ちゃん、またご指名してくれてありがとう）

（リサちゃん。何言つてんの。リサちゃんのためなら毎日通うよ!!……ってなわけで失礼する）

ブツンとテレビが切れるように声がなくなった。

「最悪だアアアア!!あのエロ仙人、キャバクラから通信してきやがつたアアアア!!」

新八はひと通り突っ込むとため息をついて、どうしようかと銀時を見た。しかし銀時の様子が可笑しい。

「ぎ、銀…さん？」

「新八よオ。お前アレだよな…あの海賊達なんとかして欲しいって言つてたよなア」

銀時は言いながら禍々しい黒いオーラを放ち、ゆっくりと今だ地獄絵図の海賊達に近付いて行つた。

「え?……ま、まさか…海賊さん逃げてエエエ!!この人やつ当

たりする気だアアア！！」

新八が叫ぶもすでに遅く、船長を含む海賊達の悲鳴が船中に響き渡った。

第2訓 人は目的を無くすとまた新たな目的を探す生き物だ………つと信じたい

うーん…ちょっと微妙なところで話、切っちゃったかも…

それでは、どうぞ

第2訓 人は目的を無くすとまた新たな目的を探す生き物だ………っと信じたい

新八は目を覚ました。辺りを見渡すと神楽は包帯を巻いた海賊達と楽しそうにトランプをしており、銀時は…何故か本格的にケーキを作っていた。もう少しで完成だ。

「え？なんですかコレ？」

新八はそんなほのぼのとした光景に眉を寄せた。それに何故自分は寝ていたのだろうか。

（あれ？確か銀さんが禍々しい黒オーラで海賊さん達の元に行ったはずだよね？）

新八が悩んでると近くに居た海賊達が気付いた。

「あつ、シンパチさん。起きたんですか？」

「おはようございます。ギントキさん、カグラさんお連れの方起きましたよオ」

海賊達の声にトランプをしながら銀時からもらったケーキを食べている神楽と同じくケーキを食べている銀時が近くに寄ってきた。

「ムシャムシャ新ハイ起きングングたアルか？」

「オイオイムシャムシャやっとなングング起きたモグモグのかよ」

「いや、あの……何言ってるか聞こえ辛いんですが…」

二人の喋りには食べる効果音が入っており、とても聞こえ辛い。

「おい、神モグモグ楽聞こえング辛ムシャムシャいってよ」

「何いバクバクってるモグモグアルか。聞こえムシャムシャ辛いノグは銀ちゃんネ」

「お前ら二人だアアアア！！ムシャムシャバクバクモグモグングングうるせえんだよオオオオ！！食べるか喋るかどっちかにして下さい！！」

新八が叫びながら言うのと二人は黙った。そして聞こえてきたのは、モグモグという食べる効果音のみ

「あつ、食べる方取るんだ」

新八は呆れながら二人が食べ終わるのを待った。

「モグモグモグモグモグモグ」

「ムシャムシャムシャムシャムシャムシャ」

「バクバクバクバクバクバク」

「ングングングングングング」

「ガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ」

「モグモグモグモ…」

「長えよ！！食べるの長えよ！！絶対これ何人が呆れてブラウザバツクしましたよ」

あまりの長さにたまらず新八は突っ込んだ。

それからしばらくすると銀時と神楽はケーキを食べ終えた。

「はあ、二人ともやっと食べ終えましたね」

新八は二人を交互に見つめながら言った。二人はその言葉にコクンと頷く。

「じゃあ、本題に入りましょう。これからどうするか……っとその前に僕ってなんで寝てたんですか？」

新八は起きてからずっと気になっていた疑問を聞いた。正直自分は寝た記憶がない。新八の問いかけに神楽と銀時は顔を見合わせた。

「え？…覚えてねえの？お前は…」

「待つて、銀ちゃん。私からあの悲劇を話すネ」

銀時が話そうとするが神楽が止めた。どうやら神楽が話すらしい…しかし悲劇とは…新八はゴクリと唾を飲み込む。神楽はポツリポツリと語り始めた。

「私と新八は銀ちゃんがやつ当たりという名の大暴れするのを見てたネ。銀ちゃんの拳は次々と海賊達を倒していったアル。もう大興奮したヨ。そして思わず… 思わず隣の眼鏡掛け器にスパーリングを…」

「待てエエエ！！お前かアアア！！」

神楽が語り新八が突っ込む。そんな新八に銀時はポンと肩を叩いた。

「落ち着けよ、新八。神楽もあんなに反省してるじゃねえか」

確かに神楽は顔を俯かせ、いつもと違い少し元気がないようだ。

「う…わ、分かりました。神楽ちゃん、今度から気をつけてね？」

新八が言々と神楽は嬉しそうに顔をあげた。それを見た銀時が眼鏡掛け器から新八を取り神楽に渡す。

「ほら、神楽。新八にお礼を言っとけ」

「うん。新八…ありがとうアル」

銀時に言われて神楽は渡された新八にお礼を言う。周りの海賊達は良かった良かったと生暖かい眼差しで神楽と新八を見つめた。

こうしてワン魂（新八の悲劇）は終わった。めでたしめでたし

「めでたしじゃねエエエ！！何ちゅう終わらせ方してんだアアアア！！大体それは新八じゃなくて眼鏡だろうが！！新八はここオオオオ！！ナレーションもテメエ等もふざけるのは大概にしるオオオオオオオ！！」

眼鏡掛け器…もとい新八は力強く叫んだ。そんな新八に銀時は口を開いた。

「何言つてんだ。新八の99%はメガネだろ？」

「そうヨ。メガネ」新八ネ」

「僕はたった1%かアアア！！そんなわけないでしょう！！」

新八がきっぱり言うのと銀時と神楽は心底驚いたといったような顔をした。

「え？なんですか？その顔…殴りますよ」

「まあ、まあ、落ち着いてシンパチさん」

海賊の一人がフォローをしに来たようだ。よくよく見ると船長服を脱いだ船長に見える。

「今まで俺たちは悩んできた。人間の心とはどこにあるのか。胸にあるのか、頭にあるのか…いや、違う。俺はメガネにこそ人間の心があると思う」

「流石船長オオオオオオ」

「感動だ！！感動したアアア」

船長が力説をすると海賊達が騒ぎだした。銀時や神楽も拍手を送っている。

「最悪だアアアア！！あの人、フォローすると見せかけてトドメ差しにきやがったアアアア！！」

新八は今日で何度目かの突っ込みをした。もうあっちもこっちもボケばかりで収拾がつかない。

「もう、銀さんも神楽ちゃんも海賊さん達もいい加減にして下さい！！あまりにもつまらないギャグばかりしてたら苦情が来ますよ」

『マジでか……』

新八の言葉に皆は一斉に呟いた。そして少し真面目にしようと思つた。

「それで、銀さん…今後どうするんですか？」

「あ？どうするって？」

銀時は新八の言葉に眉を寄せて聞き返す。

「だから、目的ですよ。今回のサブタイトルに書いてあるよう何か決めなきゃいけないんでしょう？」

「あー、適当に行き当たりばったりでいいんじゃないかねえ？」

銀時は鼻をほじりながら興味なさげにきっぱりと言った。サブタイトルなんて無視する気満々だ。

「いやいや、ダメでしょう。なんですか？そのやる気の無さ」

新八は銀時の態度にため息をつく。そしてなんとか銀時の興味を引くものが無いか海賊達に聞いた。

「あの…なんか面白い噂とか知りませんか？」

海賊達は顔を見合わせる。すると船長らしき…いや、船長が口を開いた。

「面白いかは分からねえが…この先の島の地下に悪魔の実があるらしいって言うても誰も地下なんて見たことねえがな」

「あつ、それ聞いたことある」

「俺も」

「俺も、俺も」

船長がその噂を口にする和海賊達が手を上げながら言った。どうやら全員が知っているようだ。

「悪魔の実ですか？」

新八はチラッと銀時を見た。やはり興味がなさそうだ。

「なんて言う実アルか？」

どうやら銀時は興味がなくても神楽は興味津々らしい。ワクワクとした面持ちで海賊達の言葉を待った。

「あー、なんて言っただかな？おい、テメエ等覚えてねえか？」

船長の言葉に海賊達は首を傾げて考えこんだ。噂を思い出しているようだ。

「確か、ステステの実じゃなかったか？」

「え？サラサラの実だろ？」

「いやいや、ちげえよ。アプアプの実だって」

海賊達はきちんと覚えてないらしい皆が皆、違う名前を言った。

「なんだよ。誰もきちんと覚えてないのかヨ」

神楽が使えねえなつと辛辣な言葉をはいた。
すると興味なさげにしていた銀時がゆっくりと近付いてきた。

「おい。神楽、新八。万事屋銀ちゃんのプライドをかけて、その悪魔の実を絶対探すぞ！！」

第3訓 人によっては魅惑的な言葉にきこえるよね（前書き）

海賊団の名前、船長と副船長の名前が決まりました！！

海賊団はハンド海賊団。

船長はジャン。

副船長はケン。

ちなみに副船長は部下Aのことです。

後はポンを出せば完璧だったりします（笑）
それでは、ワン魂お楽しみ下さい

（ネーミングセンス最悪ですいません）

第3訓 人によつては魅惑的な言葉にきこえるよね

「今回は最初にあらすじから始めるそうですよ」

新八が言つと神樂がきつぱり言つた。

「マジでか。じゃあ、私に任せるネ。確か前回はこんな感じだったアル」

《前回のあらすじ》

洋子は愕然としていた。夫、菓子男の浮気。そして菓子男の母、甘冬との嫁姑争い。

日々凄まじい生活の中、生きることには疲れた洋子の前に現れたのは、菓子男の同僚田河岸だった。

田河岸の優しい言葉にどんどん惹かれていく洋子。

そんな時、田河岸は洋子にプロポーズをした。洋子の心は揺れる、愛する菓子男を取るか優しい田河岸を取るか。

そんな洋子を中心に状況は一気に変わる。どうなる洋子、真実の愛は掴めるのか

「こんな感じだったアルな」

「いやいやいや、全く違うから！！読者様びつくりしてるから！！アレ？これワン魂だよね？って思ってるから！！」

新八が神樂のあらすじに突っ込んだ。すると銀時が面倒くさそうに

やってきた。

「オイオイ、お前らはあらすじも覚えてねえのか？」

「あつ、銀さん」

「ええ？こんな感じだったアルよ。ねえ？銀ちゃん」

神楽は眉を寄せて銀時に言った。そんな神楽を見て銀時はため息をついた。

「ったくよオ。面倒くさいけど銀さんがきちんとしたあらすじ見せてやらア」

《前回のあらすじ》

『侍の国』僕らの国がそう呼ばれていたのは今は昔の話。かつて侍達が仰ぎ夢を馳せた江戸の空には今は異郷の船が…

「待てエエエ！！それはさかのぼり過ぎでしょう！！…いや、間違っ
つてはないですけど…」

あまりにもさかのぼり過ぎた銀時のあらすじにも新八は突っ込んだ。

「えー、なんだよ。あらすじなんてこんなもんだろ？」

「そうヨ。文句言つたら新八がやればいいネ」

銀時と神楽は新八の言葉にきっぱりと言った。

「え？僕がやってもいいんですか？それじゃあ」

新八は少し嬉しそうにしこほんつと咳をした。

《前回のあらすじ》

僕達は…

「つまんないアル」

新八があらすじを話しだした途端に神楽が言った。

「ちよつと神楽ちゃん。つまんないも何も僕、まだ一言しか喋っていないんだけど…」

「つまんないアル。新八の存在が」

神楽がいつものように辛辣な言葉を放った。

「オオオイ！！存在がつまんないってなんだアアア！！存在するなってか！！存在するなってことか！！」

新八が叫ぶも神楽は綺麗にスルーして銀時の元へと歩いた。

「銀ちゃん…つまんないアル。」

「あー、そうだな。じゃあ、あらすじは前回を読んで下さいってことで」

「そうアルな。それが一番早いネ」

「銀さんまでつまないって……はあ、結局そうなるんですね」

銀時の言葉に神楽は頷き、新八は呆れたように頷いてはため息をついた。

そんな二人を見て銀時は息を吸い込む。そして大きな声で言った。

「それじゃあ、今度こそワン魂本編始まるぜ!!」

悪魔の実を探すつと断言した銀時の言葉に新八は眉を寄せた。何故なら銀時は先ほどまで興味なさげにしていたからだ。

「銀さん……いきなりどうしたんですか？」

確かに目的が決まったのはいいが、怪しすぎる。こんなにもやる気のある銀時を見たのは、ドラゴン。ールの世界に行けると分かった時、甘い物を食べている時、ジャンプを読んでいる時、大金が入る時しかない。

（いや、意外とたくさんありましたよ。さつき）

新八は律儀に心の中でナレーションにまで突っ込んだ。……と、とりあえずあまりやる気にならないのが銀時である。

「あ？どうしたっていつも通りだろうが」

銀時はだるそうに答えた。しかし、瞳は微かに輝いており、ジャン船長の言った島のある方向をじっと見つめている。

「いやいや、全然いつも通りじゃないじゃないですか」

新八が言うと、副船長のケンが口を挟んだ。

「シンパチさん、決まってるじゃないですか。もちろん見つけて売
るんですよ。悪魔の実は億単位ですし」

「えええ！？悪魔の実ってそんなに高いんですか？」

ケンの言葉に驚く新八。けど、それで納得した……銀時がやる気を出したのは大金を得るためだろう。

「分かりましたよ。絶対見つけ出して売りましょうね。頑張ろう神
楽ちゃん」

「おう、もちろんヨ」

話しかけてきた新八にコクコクと頷く神楽。
すると銀時が何言ってるのつと言った顔でこっちを見てきた。

「オイオイ、お前ら…俺ア売る気ねえぞ」

「え？じゃあ、なんで悪魔の実を探すんですか？」

新八の言葉に銀時は神楽を呼び耳打ちをした。神楽は一瞬驚くもう
んうん頷く。そして新八をチラッと見ると口を開いた。

「新ハイ、銀ちゃんが準備して詳しく説明してくれるらしいネ」

神楽の言葉に新八は説明を待つ。しばらくするとハンド海賊団の人たちが樽やらたくさんの果物やらを持ってきた。銀時は樽の上にたくさんの果物の中から選んだリングを置いた。そしてその傍らに立つ。神楽は樽を挟んだ銀時の向かい側に立った。どうやら準備は完了したようだ。ハンド海賊団と新八が見守る中、銀時は喋りだした。

「寝癖を直すのに苦戦して朝遅刻する。今日は大切なデートなのに髪が整わない。皆さんはそのような経験があるだろうか」

「あるある。私この前も寝癖直らなくて苦労したネ」

「なんですか？これ…なんか始まったんですけど…」

神楽はどうやら銀時の助手のようだ。銀時の言葉にうんうん頷く（ちよいちよい入る新八の突っ込みはスルーです）

「髪と言えどもなんか整わないとその日の気分がのらない。しかし、今回ご紹介する商品は一発でそんなあなたの悩みを解決！！」

「マジアルか！！どんな商品アルか」

神楽の驚く言葉にハンド海賊団や新八はじつと銀時を見つめた。

「それはこのワンピース世界に存在する悪魔の実の種類サラサラの実です。な、な、なんと…このサラサラの実一口。そう皆さん一口何ですよ…一口食べるだけであーら不思議。どんな頑固な天パだってきれいなストレートに」

「わぁっお、凄いアル。けど…そう言うのって…めちゃくちゃ高いんじゃないアルか？」

銀時はリンゴ（悪魔の実と過程して下さい）を持ち上げ芝居かったように言う。神楽の言葉にハンド海賊団達はうんうんっと頷いた。

「いえいえ、当店もその点はきちんとお勉強させてもらってます。値段は赤字覚悟の価格10億ベリーで」

『おおっ』

神楽とハンド海賊団は感嘆したような声をあげた。

「おおっじゃねえよ！！通常より高いじゃん！！ぼったくりも良いところだろオオオ！！」

新八が叫ぶがやはり動じず銀時は続けた。

「お買い求めの皆さん今すぐ下の電話番号にお電話を売り切れ必死です」

「でんでん虫はどこだアアア！！」

ハンド海賊団は皆が皆キョロキョロと辺りを見渡しでんでん虫を探している。

「いやいやいや、買えるのかよ。あんたら」

新八はもう呆れまくりだ。

「それでは、次回の商品は…パッチ売りのパッチです」

「え？僕？僕、売り物なんですか？」

銀時の言葉に新八は再度銀時を見た。しかしやはりスルーだ。

「ではでは、次回をお楽しみに…あつ、ちなみに悪魔の実がカナツチになる副作用があるのでお気をつけを」

「オイイイ！！大事なところ最後に言っただよ。そこ一番大事だよね！！そうだよね！！」

銀時のグダグダな悪魔の実の説明（テレビ通販バージョン）を聞き終えた新八は最後の最後まで突っ込んだ。

「っと言っただけで俺たち万事屋がなんで悪魔の実を求めるかわかったか？」

樽などの片付けを海賊団に任せ、新八に近づきながら言う銀時。そんな銀時の言葉に新八は頷いた。

「はあ、分かりましたよ。けど、銀さん良いんですか？悪魔の実を食べたらカナツチになるんでしょう？」

銀時を見ながら新八は首を傾げた。そんな新八に神楽は眉を寄せてきっぱり言った。

「何言ってるアルか。新ハイ、銀ちゃんは元からカナツチネ」

「か、かぐらちゅわーん。何言ってるの？何言ってるの？」

神楽の言葉に銀時は即座反応した。少し冷や汗が出てるのはみないであげよう。

「とぼけても無駄ネ。銀ちゃん…原作では海でもプールでも浮き輪装備してるアル。泳げないの丸分かりヨ…」こここの作者がそう言ってるたネ」

「作者アアアア！…なんてこと神楽にバラしてんだアアアア！…読者の皆さん！！違うから銀さん力ナツチじゃないから」

「いや、バラしてるって言ってる時点で、あんた肯定しちゃってますから」

新八の言葉に銀時はうつ…と黙った。そんな銀時を見て新八は今日何回目かのため息をついた。

「それにしても、悪魔の実のある島までどれくらい距離があるんでしょうか？」

そんな新八の一言にジャン船長はきっぱりと言い船の先を指差した。

「え？もう着いたけど？」

船長の言葉に三人は指を差された先を見た。海がキラキラと太陽の光で輝いて見える。その先にポツンと島が見えた。まだ遠いのはつきりとは見えないがそう大きな島ではなさそうだった。

ジャン船長は空気を吸い込むと大きな声で言った。

「お前ら、上陸の準備だアアア！」

『オオオ!!』

第4訓 回想ほど楽なものはない（前書き）

お待たせいたしました。

第4訓完成です。

まず、最初に…情景画写が本当にダメダメなので頑張って想像して下さい（笑）

そして…神楽がケンに言う言葉は…別に脱字ではないので…なんかゴロよかったのでそうしました。

それでは、ワン魂…始まります！！

第4訓 回想ほど楽なものはない

青い空、白い雲、キラキラ光る海だった景色は一変して……辺り一面は、鬱蒼と生い茂る森へと変わった。そう、今銀時たちは遭難的なことになっているのであった。

「であつた……じゃないイイイ！！なんですか？この始まり方！！誰もついて来れないから！！」

……今、銀時たちは遭難しています？

「ちげえよオオオ！！言い方じゃねえよ！！」

「落ち着け、新八。バカなナレーションと遊んでんじゃねえよ」

「そうヨ。今はどうやって森を抜けるかが第一ネ」

銀時と神楽が口々に言い出す。新八はそんな二人を見て言った。

「けど、このままじゃ読者の方々には何が起こってるのかサッパリなんですけど……」

新八の言葉に銀時はため息をついた。そして、面倒くさそうにガシガシッと頭を掻く。

「まったく、仕方ねえなア。じゃあ回想にはいんぞ！！」

銀時たちが遭難する数時間前……

「わぁー、銀ちゃん！！新ハイ！！すごいアル」

神楽は海賊船から降りると目の前の光景に、はしゃいだ。海賊船から見た島は、想像していたよりも大きな島なのだろう。活気に溢れた港町が広がっている。町の中心に行くであろう道の両脇には所狭しと色んな店が開いている。それはどれもこれもこの世界に来て初めて島に上陸する銀時たちにとっては見たことのないものばかり。

「銀さん。あれ、あれは何でしょうか？」

新八は年相応の表情をして、気になる物を指差しながら銀時の着流しを引っ張る。

「銀ちゃん！！銀ちゃん！！あれ、あれ見たいネ」

神楽も新八とは反対側の着流しを引っ張りながら銀時に言う。

そんな二人を見ると銀時は微かに笑い二人の頭に手をポンと置いた。

「まあ、待てお前ら、まだジャンから金貰ってねえだろ？」

銀時の言葉に神楽と新八はそうだったと顔を見合わせる。そして海賊船を見つめジャンが降りてくるのを今か今かと待った。この島に上陸する前ジャンは銀時たちが無一文だと知り、島にいる間不便がないようお金を渡してくれると言ってくれたのだ。彼は本

当に海賊団の船長なのだろうか……良い人過ぎる。

しばらく待つと誰かが、海賊船から降りてきた。三人はジャンダろ
うかつと期待してその人物を見つめた。しかし、降りてきたのはケ
ン。銀時と神楽は誰が見ても分かるくらいがつくりと肩を落とした。
新八も残念だったのだが、流石に失礼だと思い顔には出さなかった。

「え？ギントキさんにカグラさんどうしたんですか？」

ケンは二人の様子に気づくと首を傾げる。

「チッ、なんでもねえよ」

舌打ち混じりに銀時が言う。

「空気読めよ。駄目副船がつ……」

神楽は続けるように標準語でボソツと小さく呟いた。

「え？」

どうやら幸いなことに神楽の呟きは聞こえてなかったらしい。聞き
返そうとしているケンに新八は慌てて聞いた。

「と、ところでケンさん！！僕たちに何か用ですか？」

新八の問いかけにケンは思い出したように懐を探る。そしてパンパ
ンに膨れ上がった袋を取り出した。

「これ、ジャン船長から預かってきたんですけど……」

どうやらジャンは忙しくて今は来れないらしい。

ケンは銀時にその袋を渡した。銀時は袋の中身を見るとケンの肩をポンポンと叩く。

「よくやった。お前なら出来ると信じてたぜ」

神楽も銀時の横から袋の中身を確認するとうんうんと頷いた。

「ほんとネ。ただの船長のオマケじゃなかったアルな」

「え？え？これ、褒められてるんですか？カグラさんに至ってはグサグサ言葉刺さるんですけど…」

ケンは困ったように新八を見る。しかし…

「ケンさん、良かった。やってくれたんですね」

新八は何故か感動していた。

「ええええ！？シンパチさんまでエエエ！！俺はそんなに使えない子かよオオオ！！」

ケンの言葉に三人は力強く頷いたのであった。

「……………」

「……………」

「……え？銀さん？回想の続きは？」

突然戻ってきた読者の視線に新八は首を傾げた。そんな新八に木の枝を避けるように進む銀時がきっぱり言った。

「あ？終わりだけど？」

「いや、終わりだけどって…結局ケンさん弄りをしたことしか読者に伝わってないんですけど…」

新八の言葉に銀時は立ち止まりやれやれと肩をすばめた。

「オイオイ、お前なア。読者様ナメたらダメだぜ。マジ凄いいから…もう、1を知って100を知るみたいな感じだから。」

「いや、銀さん。それって10じゃないですか？大体知るじゃないよね」

銀時の言葉を律儀に訂正する新八。そのとき前を歩いていた神楽が興奮した様子で話に入った。

「マジアルか！…1で100をなんて昔隣に住んでたジェニーちゃんみたいヨ」

「いやいやいや、違うから100じゃないから…大体ジェニーって誰！…」

興奮した神楽に新八はブンブンと首を振り否定をした。

「ジェニーちゃんは1人に一度でも注意を受けると適当に100人呪うネ」

「オイイイ！！無駄に怖いんですけどオオオ！！何その八つ当たりっ子」

神楽の言葉に驚く新八。銀時も聞いていたらしく動作が止まっている。

「オ、オイオイ…神楽よオ。そんな呪いとか？非科学的なこと…え？お前信じてるの？」

銀時はダラダラと冷や汗を流した。銀時の中では呪い＝霊現象なのである。

「……そういえば、ジェニーちゃんネットにも出没するネ。そして不親切な小説を呪うヨ」

神楽の言葉に銀時はピシッと止まった。目は泳ぎ拳動不審にキョロキョロと辺りを見渡す。

「お、お前らアアアア！！何やってんだアアア！！おま…回想途中でよく分かんなくなってるんだろうがアアア！！」

「いや、あんたが止めたんでしょう」

銀時の叫びに新八がきっぱりと言う。すると銀時は新八の方へ振り向いた。

「ち、違いますう。おま…アレは回想続くと読者さんが疲れと思うった銀さんの優しさなんですう」

「なんかその喋り方ムカつくんですけど…はあ、分かりましたよ。じゃあ、そろそろ回想に戻りましょう」

新八は呆れたようにため息をつく。銀時を見つめた。銀時もコクコクと頷いた。

「じ、じゃあ、今度こそ最後までやるからの、呪いなんて信じてねえけど…やるから！！不親切じゃないから！！」

ケンと別れた三人は町の中を色々と見て歩いた。やはりどれもこれも見たことのないものでいっぱいだった。三人は本当に楽しそうに歩く。しばらく歩いていくと三人の目の前に一軒のレストランが現れた。

「銀ちゃん、私お腹すいたアル」

神楽はそのレストランを見つけるとお腹を軽く押さえ銀時をじっと見つめた。そんな神楽を見ると銀時は頬をポリポリと掻き、小さく呟いた。

「あー、じゃあちよつと食って行くか」

ケン…もといジャンから貰った金はたんまりとある。それに銀時も少しお腹がすいていた。

「そうと決まったら善は急げヨ!!」

「あつ、待つてよ。神楽ちゃん」

神楽と新八は嬉しそうに笑うとレストランへとかけっけて行った。

「オイ、お前ら食べ過ぎんじゃないぞ!!…ってかパフェ的な物ねえかな?」

銀時もガシガシツと頭を掻きながらレストランに向かう。

レストランに入ると思っていたのとは少し違った。4人で座るテーブルが幾つか転々と置いてあり。奥はバーなのだろうか?カウンタ―があり、その奥にお酒が所狭しと並んだ棚が並んでいるのだ。レストランというよりもむしろ酒場に近い。銀時は既に二人が座っているテーブルへと向かった。

「あつ、銀さん。甘い物一つしか無さそうだったんでそれと他適当に選びましたよ?」

新八の言葉に銀時は一瞬眉を寄せた。しかし店の雰囲気からして甘味があまり無いことは分かっていたので、無言で椅子に腰を下ろした。

しばらくすると料理が運ばれてきた。見たこともない料理だった。銀時たちは美味しそうに料理を頬張った。銀時たちが楽しい食事をしていると、店屋のドアが開いた。どうやら客が来たようである。入ってきた男は40代くらいだろうか?しっかりとした身体付きを

している。

「よお、マスター」

店の亭主の知り合いのようだ、慣れた様にカウンターの席に座り亭主に話かけている。

銀時は再度料理に集中しようとするも止まった。男の口から悪魔の実の情報が飛び出したからだ。銀時は甘味を平らげると立ち上がりゆつたりとした感じで男に近付いた。

「銀さん？」

「ムシャムシャ…銀ちゃん？」

神楽と新八は話が聞こえてなかったのだろう。男に近付いていく銀時を不思議そうに見つめる。

「ん？なんだ？兄ちゃん…俺になんか用かい？」

男は近付いてきた銀時に気付いたのか首を傾げた。

「ああ、わりいけど…その話もつと詳しく聞かせてくれねえか？」

男は驚くも喜々として話を始めた。ちょうどマスター以外にも話し相手が欲しかったのだろう。長々と話し出す男に料理を食べ終えた新八と神楽も近付く。だんだんと悪魔の実以外のことも話していく男。どうやら話は止まらないようだ。

2時間後。ようやく銀時たちは男から解放され、レストラン…否酒場から出てきた。三人はどっと疲れているようだ。

「話…長かったですね」

「ああ。」

「けど…重要な話が聞けましたね」

「ああ、まさか…奥さんが最終的にあぁなるとは…」

「ほんとネ。びっくりヨ」

新八と言葉にうんうんと頷く銀時と神楽。

「ちげえよ！！確かにびっくりしましたけど…実の話ですよ！！悪魔の実！！」

男の話によるとこの先の森の奥にある。洞窟が怪しいらしい。つといてもその洞窟は本当にあるのかも不明なようだ。その洞窟があるであろう森は薄暗く、似たような木ばかりが生えており、町の人でも安易に入ると迷うほどのだ。

「それにしても…銀さん。どうしましょうか？」

「ん？そりゃあ、森に行くに決まってるだろ？」

新八の言葉に銀時はきっぱりと言った。

「え？けど、さっき安易に森に入ると迷うって」

「オイオイ、新ハイ。銀さんこれでもこの小説の主人公よオ」

「え？あつ…はい…？」

銀時の言葉に新八は不思議そうに首を傾げた。

「お前…主人公が迷う森で迷子なんてベタベタな展開やらねえって」

「ほんとヨ。ベタベタ過ぎて逆に新鮮なくらいネ」

「オイイイ！！ダメじゃん！！新鮮ならダメじゃん！！」

新八は神楽の言葉に突っ込んだ。そして三人は森の方角へと歩いて行った。

「っというようなベタベタな展開により、今に至る。どうだ？不親切じゃないだろ？ないだろ？」

「そうですね…分かりましたから銀さん。歩きにくいんで離れて下さい」

新八に言われると銀時は眉を寄せた。

そう、銀時は回想中べったりと新八にくっ付いていた。

「あ？なんだよ。お前が怖くないよう銀さん守ってやったんだよ？回想中きっちり守ってやったんだよ？」

「いや、いいんで…冷や汗ベタベタな人に守ってもらってもアレなんだ」

新八は銀時の親切？をきって捨てた。そのとき、ガサガサと草むらが動いた。動きはだんだん激しくなり、こっちへ近付いてくるようだ。そして何かが出てきた。出てきたのは神楽だった。

「銀ちゃん！！新八！！見つけたアル！！……銀ちゃん？」

「あれっ、銀さん？」

二人は首を傾げた。さっきまで居たところに銀時がないのだ。よくよく探してみると、別の草むらに頭を突っ込んでいる銀時を発見した。二人は銀時に冷たい眼差しを送る。

「いやいやいや、違うからなんか…ムー大陸の入り口が」

「はいはい、ムー大陸にでもどこにでも行けヨ。クソが！！」

神楽の辛辣な言葉が銀時に突き刺さる。そんな光景を見て、新八は苦笑いを浮かべて言った。

「そ、そっすえば神楽ちゃん。さっきなんか見つけたって言うってたけど…」

「そうアル。私、発見しちゃったネ。洞窟を！！」

新八の言葉に神樂は得意気に胸を張って言った。

第5訓 主人公苛めは控えることをオススメします（前書き）

お待たせしました。

今回は…いや、今回もですが、かなり中途半端に終わってます。

ちょっとここできらなないと切るところなさげだったんで…

それでは、どうぞ

第5訓 主人公苛めは控えることをオススメします

銀時と新八は神樂のうしろを歩いてた。少し歩くとほるか高く登るのが困難だろうと思われる崖の下に着いた。

「あれアル」

神樂はまるで壁のような崖下に出ると右上を指差した。二人は神樂の指差した方向に顔を向ける。確かに神樂の言つとおり右上の壁にぽっかりと穴が開いているのが微かに見える。

「確かに…洞窟みたいですね」

新八の言葉に銀時は上を見上げては眉を寄せた。

「ああ。けどよオ、よく見つけられたもんだ」

「フフン、私にかかればこれくらい朝飯前ネ」

銀時の言葉に神樂は自慢気に胸を張った。それもそのはず、崖を上がる途中にあるので崖の上からも下からも見えにくく発見が難しい。例え遠くからでも森の木が邪魔をして見えないだろう。ほんと神樂は目ざといというか…野生の勘がすごいとい…ドカツ

「何か言ったアルか？」

ナレーションのいる空間が音とともに揺れた。どうやら神樂が殴つ…ドカツ…いえ、小突いたようだ。可愛い神樂ちゃんには殴るなん

て野蛮な芸当はできませんので

「…銀さん。なんかあっち大変みたいなんですけど」

新八がこつちを指差しながら心配そうに言った。しかし、銀時は聞こえないと耳を塞ぐ。

「バカ…目を合わせるな。巻き込まれるぞ」

銀時はナレーションを見捨てた。

しばらくすると神楽は落ち着いたらしく二人の元へ戻ってきた。

「よし、神楽も戻ってきたし…行くぞ」

先程、あっさりとナレーションを見捨てた銀時は上の洞窟を指差した。そんな銀時に新八は眉を寄せる。

「け、けど銀さん。登れそうにないんですけど…」

新八の言うとおり崖は険しく、そう簡単に登れるようなものではない。

そんな新八に神楽が力強く言った。

「何言ってるアルか新八！！そんなことで立派な忍者になれると思ってるアルか！！」

「いや、僕忍者になる気ないんですけど…」

新八は呆れたように神楽に言うのだが、神楽は聞いていない。それどころか銀時に訴えかける。

「父ちゃん。新八が、新八が、忍者にならないって…」

「バカヤロー。母ちゃんを苛めるんじゃないよ!…」

銀時は神楽を慰めるように頭を撫でながら言った。

「え?何これ?父ちゃん母ちゃんってあんたら僕の親のつもりですか」

「つもりって何アルか!…お腹を痛めて産んだネ!…」

神楽は思い出しながら言うもなんか可笑しい。何故なら思い出の中の神楽は食事を取っており、たくさんたくさん食べ……お腹を押さえてトイレに直行していた。

「待てエエエ!…お腹痛めて産んだって食べ過ぎでお腹壊しただけじゃねえかアアア!…」

「違うネ。食べ過ぎじゃなくて生卵に当たったのヨ」

「どっちも似たようなもんだアアア!…」

新八の叫び声が森の中に響いた。

「はあ。…取り敢えず真面目にやりましょう？絶対この小説進み度遅いですよ」

新八の言葉に神楽と銀時は顔を見合わせた。

「仕方ねえな。じゃあ、本題に戻るか」

銀時はガシガシと頭を掻き上にある洞窟を見上げた。神楽と新八も同じように見上げる。

「どうでしょうか」

見上げたまま新八が話しかける銀時は黙って辺りをキョロキョロ見渡した。そして何かを見つけたらしく森の方へ歩きだした。

「銀さん？」

新八は首を傾げて銀時を待つ。しばらくして銀時は何かを持って帰ってきた。銀時が持っているのは丈夫そうな木のツタだ。

「これで登るぞ」

銀時の作戦とはこうだ。誰か一人が頑張って洞窟まで登り、洞窟から木のツタを降ろし下の二人を引き上げるという作戦だ。

この作戦はあの険しい崖に登る体力と人を引き上げる力が無くては出来ない。結果的に先に上に登るのは神楽と銀時のどちらかに絞られる。

「おい、神楽行ってこい」

銀時は木のツタを渡そうとした。しかし、神楽は首を振り洞窟を指差した。銀時は指を差されたほうを見ると眉を寄せた。崖の下側は森の木により影になっているのだが、洞窟の少し下側は太陽の光に当たっており明るい。太陽の苦手な夜兔の神楽にとってあそこを登るのはキツいだろう。

最終的に登れるのは銀時だけになった。

銀時はチラッと二人を見る。二人とも早く登れやっという顔をしながら銀時を見つめていた。

（オイオイオイ、マジでか。銀さんマジ登らなきゃ何ねえの？）

銀時は崖を見ると洞窟までの距離を測った。そして崖に近付き触れる。

（ムリムリムリ。高いとかじゃねえよ。なんかアレじゃん…崖ってこうデコボコしてるんじゃないの？なんかハゲオヤジの頭並みにツルツルなんですけどオオオ）

銀時はなんとか登ろうと登りやすい場所を探す。しかし見当たらない。もうほんとツルツルなのだ。

「銀ちゃん！！ファイト」

「銀さん頑張ってください」

子供たちの声援が背後から聞こえる。銀時は覚悟を決めてブーツを脱いだ。どうやら手と足の力だけで登っていくようだ。

銀時は強すぎず弱すぎず微妙な力加減でゆっくり一歩ずつ登っている。少しでも力加減を間違えると滑って落ちてしまうのだ。

数十分後、なんとか洞窟まであと一歩というところまできた。

(も、もう少し…)

銀時は呼吸を整え全神経を手と足に意識させた。手を動かし登ろうとしたその時神楽の声が聞こえた。

「銀ちゃん。よくよく見たら下にも洞窟あったアル」

「え？」

銀時は神樂の言葉を聞き止まった。そして……止まったことで力加減を間違えてしまったのだろう。

ツルンツつと効果音を立て銀時は滑つて落ちていく。

「え？え？ええええええ！」

三人は洞窟の中を歩いていった。洞窟の中は思っていたより暗くない。何故かという洞窟の壁に所々生えているコケが光っているからだ。どうして光っているのかは分からないが、光っているものは光っているのと考えても仕方ない。グランドラインならではの不思議とも言うておこつ。

そんな不思議なコケが生えている洞窟を歩いている神楽は、ご機嫌だ。どうやら光るコケに興味津々らしい。楽しそうに歩きながらコケを手に取り観察している。

そんなご機嫌な神楽の後ろを暗い雰囲気ですいて行く一人の男が居

た。そう、先程情けなく崖から滑り落ちた銀時だ。その隣には銀時を慰めている新八もいる。

「銀さん。元気出して下さい」

「元気出せて…新八イ。わかるか？銀さん頑張ったんだよ？珍しく頑張ったんだよ？」

銀時は歩きながら自分の片手で顔をおおった。暗さはだんだんとアップしていく。

「う……あー、けど……流石銀さんですね。あんな所から落ちても怪我一つなかったじゃないですか」

そう。新八の言うとおり銀時はとっさに受け身を取り怪我をしなかったのだ。腐っても主人公ということだろうか

「あー…あれは、まあな」

銀時は新八の言葉に頬をポリポリと掻いた。どうやら少し機嫌が直ったようである。そんな銀時を見て新八はたたみかけるように言った。

「それに今からサラサラの実を探すんでしょう？元気出して頑張らないと」

新八の言葉に銀時はピクツと反応をする。

「サラサラの実…」

「そう。サラサラの実です」

銀時の言葉に頷き新八がもう一度力強く言った。

「……ッ… テメエら行くぞオオオ!!」

銀時のやる気が満々になったようだ。片手を上げ先頭をきって歩きだした。

神楽と新八は銀時の様子に一瞬驚くも笑い合つと元気よく返事をした。

「おうヨ!!」

「はい!!」

銀時復活からしばらく洞窟内を歩くと洞窟の出口だろうか？先が明るく光っている。銀時たちは早足でその光へと向かって歩いた。光の目の前…いや、洞窟の出口付近まで行くと三人は足を止めた。

「こゝ、これは…」

「わあ、すごいアル」

「なんですか？…こゝ」

銀時、神楽、新八の順で三人は声を上げた。三人の目の前にはたくさん建物が立っていた。そう、人は居そうにないが…町があったのだ。

第6訓 欲しい物は苦勞して手に入れることに価値がある（前書き）

うーん？取り敢えずここで止めました。

ちよつと状況分かり辛いかも…

それではどうぞ

第6訓 欲しい物は苦勞して手に入れることに価値がある

三人は町の中を黙々と歩いていた。町は、周りが岩などで囲まれておりまるで谷底に作られたといった感じだった。

「銀さん、やっぱりこの町なんか可笑しいですよ」

新八は町に入って何度目かになる疑問を銀時にぶつける。

「……町っぱくねえって言うんだろ？」

新八の言葉に町の様子を見ながら銀時が言った。

「…確かに町としては違和感あるアル」

そんな二人を見て神楽を思っていたことを口にした。三人が違和感…いや、疑問に思っていることは、町の中には人が居たであろう形跡はあるのだが、人が住んでいたという形跡がたくさん建物に建ってるわりには少ない。

それに建物の中には時々何かを操作するであろう機械があるのだ。この機械は何だろうか…錆びていて起動が難しいと考える。

三人は眉を寄せて考えながらも取り敢えず町を進んでいく。しばらく進んでいくと一際高い何かの塔が建っているのが見えた。どうやらその場所がこの町の一番奥にある建物のようなのだ。

その塔が見えると三人は顔を見合わせコクンッと頷き塔へと向かった。

「思ってたより高えなア」

銀時は塔の前に着くと見上げて小さく呟いた。銀時たちの世界の建物と比べると小さいのだが、ワンピースの世界の建物だと考えると高い。

「取り敢えず、入ってみるネ」

神楽が塔の入り口へと向かう。そんな神楽に慌ててついて行く二人。

塔の中に入ると一つの机と椅子が置いてある。隅には町に置かれていた何かを操作する機械がある。上へと続くであろう階段は見当たらない。

「なんだここ？」

銀時は眉を寄せた。そんな銀時に新八も不思議そうに呟いた。

「階段が見当たりませんねえ？」

銀時と新八は階段を探そうと壁をポンポンと叩き始めた。隠し通路がないか調べているのだ。そのとき神楽が銀時を呼んだ。

「銀ちゃん。なんか弄ってたら動き始めたアル」

神楽が言うと同時に、ドアの方からガチャンと鍵の閉まる音がした。三人は一斉にドアの方へ視線を向ける。新八が代表となりドアを見

に行った。

ガチャガチャ…

「あの…開かないんですけど…」

ガチャガチャつと音を鳴らす新八に銀時は近付いた。

「オイオイ、開かないとか勘弁しろよ。銀さんは騙されねえぞ」

信じたくないのだろう。銀時はドアに近付き思いつ切り引っ張った。しかしドアの鍵は頑丈らしくビクともしない。

ガチャガチャガチャガチャ…バンバン…ドカドカ

銀時はドアを引っ張り叩いたり蹴ったりしてみるのが鍵以外も頑丈らしくまったく効果がなかった。

（と、閉じ込められたアアア…！）

銀時はだんだんと冷や汗を流し助けを求めるようバンバンバンバンつとドアを叩く。そんな銀時に新八は慌てて言った。

「お、落ち着いて下さい！！銀さん」

「おま…落ち着けてアレだぞ！！俺らいきなり閉じ込められてんだぞ！！ってかなんで閉じ込められてんのオオオ！！」

銀時の言葉に新八は苦笑いを浮かべる。

（銀さんは閉じ込められるとかなり動揺するな…そういえばエレベーターの時もそうだった）

などと考え、新八はかなり冷静のようだ。そしてドアを見つめ何かを考える。

「銀さん！！神楽ちゃんなら鍵壊せるんじゃないですか？」

確かに夜兎の力を持ってすれば鍵が壊れるかもしれない。新八の言葉に銀時は神楽の方を見た。神楽はいまだに機械を弄っている。

「か、神楽ちゃん！！何弄ってんの？何弄ってんの？なんでこんな状況になってるのか分かってんのかゴラ」

銀時が神楽にそう言った瞬間何かを押したのだろう。ゴゴゴゴゴオオオと何かの機械が動く音が部屋に響いた。そして部屋の真ん中の床が丸い形にせり上がっていく。まるでステージのようだ。そして光がスポットライトのようそのステージに集められた。

「なんか出てきたネ」

神楽は機械を弄るのをやめステージに近づく。

「バカヤロー！！安易に近づくんじゃねえ！！」

そんな神楽を銀時が止めた。仕方がないので神楽はステージを遠くから眺めた。そんな時、何か打開策はないかと机の引き出しを探っていた新八が何かの本と白と赤の旗を持ちやってきた。

「銀さん、神楽ちゃん。こんな物発見したんですけど…」

二人に見せるように発見した物を前に出す。

「旗と…本か？なんの本だ？」

神楽が旗を興味津々に持ったのに対し銀時は本が気になったのだろう。新八に尋ねた。すると新八は本を開き読み始める。

「えっと…何かの日記みたいですわね。……私は今日、この土地にテーマパークを作ることにした。皆が笑顔になる場所、それを自分で作るなんてなんて誇らしい仕事なんだろう。さすが私だ…こんな私だからモテるのも仕方がない。モテると言えば近所の娘さんが今日も私のことを…」

「新ハイ…ちよつとそこ飛ばせ…ム力つくから」

銀時の言葉に新八も深く頷き飛ばした。

「……とうとうテーマパークが出来た。しかし、場所が悪いせいか…あまり人が来ない。そこで私はテーマパークの最後に目玉となる塔を作ることにした。4つの試練を一つずつクリアしていくたびに階段が現れるというシステムだ。賞品はこの前手に入れた伝説の悪魔の実…その名も………」

「新八？」

「どうしたアルか？」

突然喋らなくなった新八に二人は首を傾げる。すると新八は本…いや日記から顔を上げて言う。

「なんか…この人書いてる途中で寝たのかよだれで解読不可能になってます」

銀時と神楽は顔を見合わせたため息をついた。

「オイオイオイ、マジふざけんなよ！！何これ？散々振り回しとい
て悪魔の実はテーマパークの賞品なんで…もうありませんってオチ
？」

「ほんとネ！！ここまでの苦労はどうなるアルか！！」

二人はイライラとした感じで文句を言う。二人とも今にも暴れそう
だ。そんな二人を見て新八は慌てて言った。

「二人とも待つて下さい！！もしかしたらまだ…まだあるかもしれ
ませんよ」

新八の言葉に二人は止まった。そしてどういことだったと言った感
じで新八を見つめる。

「実はこの日記に書いてあるんですが…試練があまりにも難し過ぎ
て誰一人頂上に到着したものが居ないと…」

「あ？もしそうでも従業員が機械止めて賞品回収してんだろぅが」

新八の言葉に銀時は微かに眉を寄せてきっぱりと言った。しかし新
八は首を振り銀時の言葉を否定する。

「それが…この塔の機械は…どうやら一度動いたらずっと動いたま
まらしいです。どうやっても頂上につかないので悪魔の実は諦めた
らしいです」

「ってことは……まだ上にあるってことか」

銀時は天井を見上げて眉をよせた。そしてため息をつく。新八を再度見つめる。

「で？一つ目の試練ってのは？」

銀時の言葉に新八はパラパラと日記をめくった。そして見つけると口を開いた。

「一つ目は日記と一緒に置いてあった赤と白の旗を使うみたいです。ステージに上ると声が流れるのでその通り旗を上げていく……っと書いてあります」

「そうか……よし、行け神楽！」

銀時は神楽の持っている旗を見るときつぱりと言った。神楽もそれに頷くのだが、新八が止めた。

「あつ、銀さん。それはダメです。この試練は大人がやらなければならぬみたいですよ？」

「……なにそれ……」

新八の言葉に銀時は嫌そうに顔を歪める。そんな銀時を見て新八は苦笑をしながら言った。

「さあ、よく分かりませんが……サイズがどうか……」

「サイズだア？なんか嫌な予感するんだけどよオ」

心底嫌そうに言う銀時に神楽が旗を渡してきた。

「そういうルールなら仕方ないネ。銀ちゃん、頑張れ」

銀時は神楽から旗を受け取ると嫌な予感しかないステージに向かって歩きだした。

銀時がステージに上がると周りがチカチカと光だした。そしてどこからともなく声が聞こえる。

『まるでゴミくずのような汚い世界を生きてきたダメな大人たち…略してマダオ準備はいいかい？』

聞こえてきた声は辛辣だった。

「オイイイ！！辛辣だった…じゃねえよ！！何？何これ？喧嘩うってんのオオオ！！」

銀時が突っ込むも音楽がなり、試練が始まった。

銀時は眉を寄せるも声の言った通りに旗を上げていく。声のフェイントにもなんなくクリアしていく。

（なんだ？難しいって言うわりには手応えねえなア）

銀時はあまりの手応えの無さに油断したのだろう次の声の動作を間違ってしまった。

「あつ、間違え…のわアアア！！」

銀時が間違えた瞬間間違えた場所に向かってどこからともなく矢が

飛んできたのだ。銀時は突然のことに驚きながらも矢を避ける。

「何これ？何これ？え？テーマパークだよな？テーマパークの試練だよな？」

銀時は矢が飛んで来ないように声の通り手を動かしながら言う。その言葉に新八が反応した。

「銀さん。日記の最後にこの試練は怪我人が続出して中止になったって書いてありました」

「銀ちゃん。まだ終わらないアルか？私飽きたネ」

二人の言いぐさに銀時は眉を寄せて言った。

「新ハイ！！なんで銀さんがこんな風になってるのに冷静？つつーか神楽は黙ってる！！」

数分後：なんやかんや言いながらも銀時は一つ目の試練をクリアしたようだ。音が変わり、ゆっくりと一つの壁が上にスライドをしていく。その先には上に上る階段が見えた。

銀時はステージから降りて二人の元に向かう。

こうして三人は階段を上って行った。

第7訓 試練に危険はつきものである（前書き）

ちよつとよく分からない試練ですが…どうぞ

それでは、始まり始まり

第7訓 試練に危険はつきものである

一つ目の試練を終えた三人は階段を登っていく。階段の幅はちょうど人がすれ違えるくらいだ。階段は途中で上り坂に変わった……三人はひたすら登っていく。たくさん登る。何故か2階に着かない。

「…なんか長くないですか？」

新八は階段を登りながら銀時と神楽に言った。すると登りながら神楽がきっぱり言う。

「気にすることないネ。きつと1階から2階までの距離が長いだけ
三」

「……………いや、そんな塔普通無くなえ？」

新八は神楽の言葉にボソツと小さく呟く。そんな新八に銀時が眉を寄せる。

「無いな…確かに無いな。そんな塔」

「つてか…なんかこの坂動いてません？」

新八の言葉に二人は立ち止まった。すると後ろへと流れていく。

『あつ、ほんとだ…』

銀時と神楽は同時に呟いた。そんな二人に新八はため息をはいた。

「この歩くスピードじゃあ、何時までたっても着きませんね」

床を見ながら言う新八に二人も頷き、少し歩くスピードを速めた。しかし、三人が速めると床の動く速度もだんだんと速まる。銀時たちは負けじと歩く速度を速める、しかし床も速い。とうとう三人は走り出した。すると背後からガチャンガチャンと機械の動く音。そして、ゴロゴロと何かが転がる音がし始めた。

「何でしょうか？このお…とオオオ！！」

背後の音が気になり走りながら後ろを向いた新八が叫んだ。

「あ？新八？どうし……」

銀時はダルそうに走りながら後ろを向いてその光景に目を見開いた。そこには常識を覆す光景があった。なんと銀時たちは坂を上っているにもかかわらず大きな岩が三人に向かって転がってくるのだ。

「おかしいだろオオオ！！なんで岩が上ってきてんだアアア！！」

「キャッホーイ。すごいアル」

銀時は叫ぶ。神楽は楽しそうに走っている。その時、新八が壁のくぼみに置かれていた本を見つけた。それは1階で見たこのテーマパークの園長の日記だった。

「銀さん！！日記！！また日記見つけました」

新八は走りながら銀時に見せるよう日記を振った。

「よし、新八…読んでみる」

銀時は走りながら日記をチラッと見ると言った。新八も予想がついていたのだろう日記を開いて読み始める。

「今日は、凄いことを思い付いた。岩を使つての試練だ。テーマパークの客に岩が転がってくる。するとドキドキ感を楽しめる。流石私だ…しかし、何故か雇つた従業員たちに却下された。彼らは私のこのナイスアイデアに嫉妬をしているのだろう。なんて醜い人間なのだろう。しかし、出来た人間の私は許そう。優れた人間に嫉妬するのはとうぜ…」

「新八…それ長い？」

銀時は眉を寄せて新八と日記を交互に見つめた。

「はい……日記のほとんどがこれですね……飛ばしましょうか？」

日記をパラパラとめくりながら呆れたように新八は言う。

「当たり前だアアア！！なんだ？この日記！！どこのナルシストが書いたんだ」

銀時は走りながらイライラと機嫌悪そうだ。慌てて新八は日記から重要な部分を探し読み始める。

「二つ目の試練には悩んだ。何せ岩を上らせようと思っているのだ。しかし、常識的に岩が上るなどありえない。そこで私はある有名な天才学者に相談した。学者は興味深そうに話を聞いてくれる。どうやら協力をしてくれるようだ…数ヶ月後完成した。岩は客の歩くス

ピードがある一定の速さに達すると作動する仕組みだ。しかしあまりの完璧な仕掛けに客の何人かが岩の下敷きになった。…苦情がたくさん来る。とうとう私は道の途中にある穴の中に安全レバーをつけることにした。床も岩も止まるレバーだ…」

新八の言葉を聞くと神楽が前方を指差した。穴があったようだ。

「銀ちゃん、アレ」

「よし、行つてくらア!!」

銀時は走るスピードを速め、穴へと近付き勢いよく飛び込む。そして…

「うそオオオオオ!!」

叫び声が聞こえた。新八と神楽は顔を見合わせた。

「銀さん!! どうしたんですか?」

「銀ちゃん?」

新八と神楽は穴へと走り飛び込んだ。そして銀時の上に着地。

「お前らアア!! 殺す気? 銀さんのこと殺す気?」

なんと銀時は穴の途中で手足を伸ばし落ちないように踏ん張っていた。そんなところに二人が勢いよく落ちてきたのだ…ズリズリと少し下に下がってしまったのだろう。銀時の手の少し上に爪で引っ掻いた跡が残っている。

「銀さん…なんでこんな途中で止まってるんですか？」

新八は眉を寄せてきつぱり言った。すると銀時が言う前に神楽が下を見ながら言う。

「新ハイ…ちょっと下見てみるネ」

「え？……」

新八は神楽の言った通り下を見た。そして驚愕する。下にはなんとたくさんの槍が立っていた。あのまま落ちていたら怪我をするどころでは済まないだろう。

「なんですか？これ…安全レバーへの穴じゃなくて地獄への入り口じゃないですか…」

「新八…穴間違えたんじゃないアルか？」

流石の神楽もこれはないだろうと冷たい目で新八を見つめる。そんな神楽に新八も不安になったのだろう…再度日記を見始めた。もちろん銀時の上で…

「あつ、ありました。…穴の中に安全レバーを入れた。場所は穴の途中にある赤いボタンを押すと出現するようになっていて……追伸、なんか穴だけじゃ寂しいので槍を入れた。怪我人続出（笑）」

『（笑）じゃねえええ！！』

新八と銀時は同時に突っ込んだ。

「なんですか？この日記！！絶対喧嘩うつてますよ！！」

新八はバンバンと日記を叩く。その振動が銀時へと伝わる。銀時の手足がプルプルと震えだした。

「し、新八…やめて？気持ち分かる。充分分かるから！！今はほんとヤバイから」

プルプル震えながら新八に言う。すると神楽も言い出した。

「そうネ。今は赤いボタン探すアル！！じゃないと銀ちゃん生まれたての天パのまま…」

「何？生まれたての天パって！！……まあ、そうですね。探しましよう」

二人は銀時の上からキョロキョロと辺りを見渡し始めた。そして銀時の頭の方…の上の方に赤く光るボタンを発見した。

「あれアルな」

神楽は銀時の頭を思い切り踏んづけてたちあがった。

「ちょ…いだっ、いだっ」

銀時が痛そうに声をあげるも神楽は知らん顔で手を振り上げる。そして、ボタンに向かって手を思い切り下ろした。

「ホワチャアアアア！！」

かけ声と共にボタンを押す。その瞬間ボタンは大破した。

「オイイイ！！何してんの？なんでボタンじゃなくて秘孔押してんだアアア！！」

あまりの出来事に銀時はプルプル震えながらも突っ込む。新八が大破したボタンの欠片を手に取り慌てたように言う。

「ちよつとどうするんですか？これ！！レバーも出てきませんし、ほんとどうするんですか？」

そんな銀時と新八を見ると神楽は不服そうに頬を膨らました。

「なんだヨ。押せ言うから押したのに…分かった、分かった。私がなんとかしてやるネ」

神楽はそう言うのと銀時の頭を踏み台に穴から飛び出した。

「いだだだっ」

「ちよつと待つて神楽ちゃん！！無理すること……」

銀時は痛がり、新八は穴から出て行った神楽を止めようと声を上げる。しかし新八の言葉は途中で止まる。ドカーンッ！！と凄まじい音がしたからだ。

「神楽アアア！！」

「神楽ちゃん！！」

その音を聞き銀時と新八は神楽を呼ぶ。しかし、返事がない。

「ぎ、銀さん!!どうしよう……神楽ちゃんが!!」

新八は慌てたように銀時に言う。

「オイ、新八。しっかり捕まってるよ……うらアアア!!」

銀時は新八に言うとう手足に力を込める。そして交互に上へと手足を置き上がる。そしてそのままものすごいスピードで上がり穴から飛び出した。二人が穴から出るとある光景が目に入ってきた。それは岩に漬れた神楽……などではなく。真つ二つになった岩と機械だった。

二人が呆然とその岩と機械を見ていると背後から声が聞こえた。

「あれ?お前ら出てきたアルか?」

それはどこから持ってきたのかロープを持った神楽だった。

「神楽ちゃん!!良かった。無事だったんだね!!」

新八は嬉しそうに神楽に駆け寄った。銀時も新八の後ろについて行く。

「何言ってるネ。私があんな岩なんかにはやられるわけないヨ」

神楽はそんな新八にため息をついた。そしてこれだから新八はつとブツブツ呟く神楽。そんな神楽に新八は苦笑いを浮かべるも何やら気付いたのだらう口を開いた。

「そういえば、神楽ちゃん…そのロープ…」

新八が神楽の持つロープに気がつき指を差した。すると、とたんに慌てはじめる神楽。

「ち、違うネ！！別にこれは銀ちゃんたちを助けるためじゃないアル！！たまたま…そうたまたま拾ったネ」

神楽の言葉に銀時は新八と顔を見合わせた。そして近付くとポンポンと神楽の頭を撫でる。神楽は照れくさそうに…しかし嬉しそうに笑った。新八はそんな二人を微笑ましそうに見つめた。

「よし、じゃあ行くか」

銀時のかけ声と共に三人は少し先に見える階段へと歩いて行った。

銀時たちはしばらく歩いてとうとう4階のドアの前についた。

「お前ら、これが最後の試練だ！！気を引き締めていくぞ」

「おう！！」

銀時の言葉に神楽は握り拳を作り頷いた。そして最後の試練のドアを開け…

「開けるなアア！！3階飛ばしてんだろугアア！！」

新八が叫ぶように言った。そんな新八に銀時がため息をつきながら言う。

「オイオイ、何言つてんの？3階やったじゃん」

「いや、確かにやりましたけど…文にしてないんで読者の方々には分かりませんよ」

新八が心底呆れたように言った。すると神楽が口を出した。

「もういいじゃん。2階での私の活躍で皆満足してるアル。わざわざ地味な3階の試練なんて誰も見たくないネ」

「そうだよなア…かなり地味だったもんなア」

神楽の言葉に銀時もうんうんと頷く。そんな二人も見ると新八がボソッと小さく呟いた。

「あんたら…いい加減にしないとジェニーちゃん連れてきますよ」

新八の言葉に銀時は固まった。そして冷や汗を流しながら言う。

「地味だけど回想いくぞ！！ほんと地味だけど…」

階段を上がり3階のドアの前に銀時たちはついた。

銀時はドアの前に着くとガチャッと開けて中に入った。中にはお馴染みの日記が落ちていた…それに真っ直ぐ廊下のような通路が伸びている。通路の先にはレバーのようなものが見えた。銀時は日記を拾うと新八に渡す。すると新八は銀時から日記を受け取ると読み始めた。

「えっと…三つ目の試練はいかに気配を消せるか。気配を消し、この通路の先にあるレバーを作動させる。すると階段が現れるのだ。少しでも気配を察知すると機械が作動し矢が飛び出す仕組みになっている。私もやってみた。流石私だ、作動が全くしない。従業員たちは嫉妬をして園長地味だから…近所の娘さんからストーカーの被害届が出てますよ…などと言っていたが…そんなことない!!私は頭も良くてモテモテなのだ…地味なんて…そんなこと…ないよね?」

読み終えた新八。そして、聞き終えた銀時と神楽…三人の間に変な空気が漂った。2階までの日記はムカつきながら読んでいたのになんだろう?このなんともいえない感じは…

「と、とにかく…気配を消して進めばいいんですよ」

新八の言葉に二人はうんうんと頷いた。そして神楽が新八をじっと見つめて言った。

「じゃあ、行ってくるアル。地味ハ!!」

「誰が地味ハだアアア!!だいたい次僕が行くんですか?」

新八の突っ込みに神楽は当たり前前だろつと胸を張って言った。

「1階は銀ちゃん。2階は私。つとなると3階は地味ハイ…お前ネ」

「だから地味八じゃねえええ!!……はあ、だいたい僕気配消すなんて芸当出来ませんよ」

神楽に突っ込みながらきっぱりと言う新八に神楽は眉を寄せる。

「いいから行けヨ!!」

「ひっ…」

神楽は通路に向かって新八を蹴り飛ばした。新八は通路で転けながらも頭を手で守るように抱えた。しかしいつまでたっても矢は飛んで来ない。

「あれ？」

新八は首を傾げると立ち上がった。そして恐る恐るレバーへと向かって歩き出す。難なくレバーのある場所に着き、階段を出現させた。そして普通に歩き二人の元へ戻ってきた。

「どうやら、古い機械ですし…今は起動してないみたいですネ」

新八が言うと神楽はおもむろに日記を取り通路へと投げた。

するとその瞬間すごい勢いで日記に幾つもの矢が刺さる。通路に落ちた日記は矢に刺され蜂の巣状態だ。

「じゃあ、行くか」

銀時はその光景を見ると階段へと向かう。そんな銀時に神楽は慌ててついて行った。

「どういうことオオオ！！本より存在感ないって言いたいのか！！言いたいのかアアアア！！」

新八は3階でしばらく叫んでいた。

「つとこんな感じだな。あー、やっぱりめちゃくちゃ地味だわ」

回想を終えた銀時がため息をついた。神楽も不服そうに呟く。

「ほんとアル。やっぱり回想いらなかったヨ！！新八が地味なんて当たり前ネ」

「うるせえよ！！あんたらに本より地味にされた…僕のこの気持ち分かるかアアアア！！」

新八の言葉に二人は分かるわけないといった顔で見つめた。

「それにしても…地味な回想してたせいでもうページ無いわ」

「ほんとネ。つというわけで四つ目の試練は次回になるアル」

神楽の言葉により、今回はここまで。次回をお楽しみに…

「いやいやいや、ページ無いわけ無いよね?…え?ほんとに今回これで終わり?」

「……………終わりたいですね。次回もよろしくお願いします」

第8訓 人の夢と書いて儚い……言葉通りだね（前書き）

なんとか…出来ました。

今回はギャグ要素少なめでお送りしております。

もう色々ダメダメですが…どうぞ

第8訓 人の夢と書いて儚い……言葉通りだね

三人は最後の試練の部屋へと入った。部屋の中は一番隅にお馴染みの日記が置かれており、何も無いように見える。新八はもう慣れたように日記を開いて読み始めた。

「私は、絶望した。今日海軍が来たのだ……ストーカーの疑いで連行いたしますと……ありえない！！ありえない！！何故に何故に私がストーカーなどと……復讐だ！！復讐をせねば……この私を認めない腐った世界に！！私は復讐に燃えた。その時、海軍基地に来ていた学者と話す機会を得た。何やら先祖代々パシフィスタという物を作ろうとしているらしい……私は莫大な金を払いそのサンプルを一つもらった。しかし町で暴れさせると海軍に指名手配にされると恐れた私はそれを使い試練に来た者達を殺すことにした。さあ、復讐の始まりだ！！」

新八が読んだ後二人は声を揃えて言った。

『ただの八つ当たりじゃねえかアアア！！』

「何ですか、この人……めっちゃくちゃ器小さいんですけど……」

新八が呆れたように呟く。その呟きに銀時はうんうんと頷いた。

「それにしてもよオ。その……パティシエだっけか？居なくねえ？」

「銀さん、パティシエじゃなくてパシフィスタです。……確かに居ませんね」

キヨロキヨロと辺りを見渡す銀時を見ると、新八も辺りを見渡した。すると神楽がじつと天井を見ていることに気付いた。

「神楽ちゃん？どうしたの？」

新八が聞くと神楽は天井から目を離さずきっぱりと言った。

「戦ってるアル」

「戦ってるって誰………」

新八は神楽と同じように天井を見上げると止まった。

銀時はそんな二人を不思議に思い天井を見上げる。天井にはなんかゴツいいかにもロボットが張り付いていた。それは、今のパシフィスタのようなクマ的なものではなく…某天才からくり技師のところにある三郎のようなものだ。

「何あれエエエ！！いつから！！いつから居たんだ」

銀時は目を見開き神楽に言う。神楽は口を開いた。

「私達が部屋に入った後しばらくして…現れたネ」

神楽が言うと同時にガツシャと機械らしい音を立ててパシフィスタのサンプルが降りてきた。三人は武器を構える。神楽は傘。新八と銀時は木刀だ。

先手必勝とばかりに神楽が動いた。サンプルへと走って行き傘で一撃を食らわした。ドゴツと大きな音がしたにも関わらずサンプルにはダメージがない。

「オイオイ、マジかよ」

神楽はあれでも夜兎だ。その一撃を受けて無傷とはどれだけ頑丈なんだ。銀時は眉を寄せる。するとサンプルは攻撃を仕掛けてきた神楽に向かって拳を振り上げた。神楽は傘を構え受け止めるがあまりの力に苦しそうに顔を歪めた。銀時は舌打ちをし、神楽とサンプルの間を開けるようにサンプルに向かい木刀を振り下ろした。

「銀ちゃん!!」

サンプルは銀時の攻撃を後ろに下がりよけた。銀時は神楽を庇うように前に立つ。新八も銀時に習うよう神楽の前で木刀を構える。

「大丈夫？神楽ちゃん!!」

新八の言葉に神楽は銀時の隣に立ちきっぱり言った。

「あれくらい大丈夫アル。それより気をつけるネ。あいつ思ったより厄介ヨ」

神楽はサンプルを睨みつけながら再度傘を構えた。

神楽の言葉に新八はコクリと頷いた。

サンプルが近付いてくる、三人は足並みを揃えて同時に攻撃をした。銀時は正面、新八と神楽は左右から。攻撃は当たる、しかしダメージといったダメージが見当たらない。それに加えてサンプルの振り下ろしてくる拳は凄まじく床には拳型の穴が開いた。幸いなことに攻撃のスピードはそう速くないので注目していれば避けられるが、このまま戦いが長引けばそれも難しくなるだろう。

（まさか銀さんや神楽ちゃんが苦戦するなんて…せめて弱点さえ分かれば）

新八はこの状況に眉を寄せる。そして日記が目に入った。

（日記…そうだ。確か…最後のページに封筒が挟まっていた）

新八は思い出すと日記に向かって走った。サンプルもそれに気付き新八の元に…

銀時と神楽は眉を寄せた。突然サンプルが攻撃を止めたかと思うと走っていったのだ。二人はサンプルの走っていった方向を見ると目を見開いた。新八が日記を取ろうとしており、サンプルが拳を振り上げている。もちろん新八はサンプルに気付いてない。

「新ハイイイ!!」

神楽が叫ぶ。銀時は新八のもとへと走った。果たしてこの距離間に合うのだろうか…

「なっ!?!」

新八は神楽の声に気付き日記から目線をそらした。目の前にはサンプルが拳を振り上げ下ろしてきていた。新八はギョツと目を閉じる。聞こえてきたのは、ぐはっと小さな悲鳴と骨が折れる音…そして壁がガラガラと崩れるような音だ。

「え?」

新八は目を開けた。そして、音のした方向を見る。壁が崩れており、壁の向こうに何かが飛んだようだった。

「ぎ、銀ちゃん!!」

崩れた壁に向かって神楽が叫ぶ。新八は理解した。自分を守って銀時がやられたのだと。

「銀…さん…」

新八は放心したように崩れた壁を見つめる。サンプルは再度拳を振り上げて新八を狙った。新八に向かって拳が振り下ろされる。

「ホワチャアツツ!!」

神楽が掛け声とともに拳を蹴り上げて軌道を逸らす。床に着地をし、新八の手を掴むと走って逃げた。

「何ボーっとしてるアルか!!」

神楽は新八に怒鳴るように言った。

「神楽ちゃ…銀さんが……ぶひゃらッ」

不安そうに壁を見つめる新八に神楽はバキッと思い切り殴った。

「しっかりするネ!!あれぐらいで銀ちゃんがやられるたまかッ!!」

神楽に殴られ新八は吹っ飛ぶとヨロヨロと起き上がった。

「神楽ちゃん…そうだね。銀さんは殺しても死にそうにないし……」

…けどこれやり過ぎじゃねえ？」

起き上がった新八の頬はぷくつと膨れ上がっていた。

「ぶひゃひゃひゃつ、新八すごい顔アル」

神楽は新八の顔を指差して楽しそうに笑うそんな神楽を見て新八がきつぱり言った。

「ちょ…神楽ちゃんがやったんでしよう！！」

新八が言うのと近くで機械音が聞こえた。どうやらサンプルが来たようだ。新八は木刀をギュツと握りしめ、神楽は傘を構える。

『万事屋銀ちゃんをなめんなこのヤロー！！』

二人は同時に言うと言とサンプルに向かって行っった。

「いつ…クソつ、こりゃあ骨いつてんなア」

銀時は攻撃を受けたわき腹を押さえて瓦礫の中から起き上がった。攻撃を受けた衝撃で少し気を失っていたようだ。穴の空いた壁の遙か向こうでは戦う音が聞こえる。

「神楽、新八…」

銀時は木刀を杖代わりにして立ち上がった。そして戦いの場に戻ろうと壁へと歩こうとした。しかし背後から微かに何かの音がするのに気付き立ち止まった。そして杖にしていた木刀を握り締めゆっくりと振り向く。

「こゝ、こいつは…」

銀時はそう呟き目を見開いた。

一方、新八と神楽はサンプルと戦っていた。サンプルが新八に攻撃しようとするのを神楽がそれを阻止。反対にサンプルが神楽に攻撃しようとするのを新八が攻撃をして阻止。二人は交互に攻撃をした。しかしサンプルにはあまり効果がなかった。流石に長い間戦って疲れていたのだろう。傘を振り下ろし攻撃をした神楽のバランスが崩れた。そんな神楽にサンプルの拳が迫る。

「神楽ちゃん!!」

新八が声を張り上げた。神楽は覚悟を決めて衝撃に備える。しかしいつまでたっても衝撃は来なかった。神楽は拳が向かってきた方向を向く。なんと拳は神楽に当たる直前で止まっていた。

「あれ？」

神楽が不思議そうに首を傾げた。

「危ねえなオイ、間一髪だったじゃねえか」

銀時が飛ばされた壁から姿を現した。

「銀ちゃん!!」

「銀さん!!」

二人は動かなくなったサンプルを警戒しつつも嬉しそうに銀時のもとへと走る。

「あれ…銀ちゃんがやったアルか？」

銀時の元へ着くと神楽はサンプルを指差して聞いた。

「ああ、ちょうどあれのシステム機械のある場所に飛ばされてよオ」

そう、銀時が飛ばされた所には幸運なことにサンプルの制御システムあったのだ。銀時は慣れないながらもそれを弄りサンプルを停止させたのだ。

銀時と神楽が話しているとおずおずと新八が口を開いた。

「あの…銀さん、さっきは…」

そんな新八を見ると銀時はポンと頭に手を置いた。そして口を開く。

「あー、新ハイ…銀さんなんか甘いもん食べてえ。はやく悪魔の実ゲットして町帰るぞ」

「え……あつ、はい！！…けどあまり食べ過ぎたらダメですよ」

銀時の言葉に新八は嬉しそうに頷き、そして注意をした。そんな二人を見て神楽は二人の間に飛び入った。

「銀ちゃん、新八。私もめちゃくちやお腹すいたネ！！全財産使ってたらふく食べるアル」

『いや、それはダメだろ』

神楽の言葉に二人は同時に突っ込んだ。そしてクリア時に現れる階段へと向かおうとするもそれらしい階段が見当たらない。

「あれ？階段見当たりませんね…」

新八が呟くと遠くから機械の音が聞こえた。三人は、音のした方を見る。なんとサンプルが動いていた。

「え？嘘…でしょう」

「まだ動くアルか？」

新八と神楽が呟く。そして三人は戦闘態勢へと入った。しかしサンプルは三人ではなく壁へと向かった。そして目的地についたのか拳を振り上げ壁を壊す。壁の先には階段が見える。サンプルは壁を壊すとそのままどこかへ去っていった。

「何あれ…」

「壁壊して行つたアル」

「クリアってことだな」

新八の問いに神楽と銀時がうんうん頷いた。

「オイイイ！！なんだこれ？え？いいの？なんかグダグダ感あるんだけどオオオ！！確実に階段の出し方おかしいだろオオオ！！」

「仕方ないネ。この小説の作者なんてこんなものヨ」

「そうだぞ。このグダグダ感がこの小説の良いところだ」

叫ぶ新八にきつぱり言いながら神楽と銀時は階段へと向かった。

三人が階段を上がりまず目についたのはクリアおめでとぅつと書かれた垂れ幕だった。そしてその下には机があり、その上に宝箱が置いてある。

三人はそれを見ると宝箱に歩いていった。銀時がドキドキワクワクしながら宝箱のフタに手をかけ開ける。

中には黒くてグルグルと螺旋模様のブドウみたいな果物が入っていた。三人はそれを見て歓喜の言葉をあげるでもなくほぼ同時に心の中で呟いた。

【なんかすつごく不味そう！！】

しばらくと三人は悪魔の実をじっと見つめた。三人の中に変な空気が流れる。

「銀ちゃん、サツサと食べるネ」

神楽が悪魔の実から目を外し銀時を見つめた。新八も悪魔の実から銀時を見た。

二人の視線を受けると銀時は恐る恐る悪魔の実を手に取り眺めた。あまりにも不味そうで食べる決心がつかないのだ。

（何これ？この果物すっげえ不味いですよオーラ出してんだけど……しかも真っ黒じゃん！！お妙の可哀想な卵焼き並みじゃねえか！！）

銀時は悪魔の実を見つめ、二人に視線を移した。二人はじっと銀時が食べるのを待っている。

（食べなきゃダメオーラ出てるし。いや、待て待て銀さん……あれだ。確かに不味そうだけどこれはサラサラになる実だろ。俺のキューテイクル侍への一歩だろ。行け行くんだ俺エエエ！！）

長い葛藤の末銀時はついに大きな口を開けた。神楽と新八はそれを食い入るように見つめる。銀時は悪魔の実を食べようとするも再度止まった。

（……………そういや……これ、本当にサラサラの実なのか？確か確実にサラサラの実とは誰も言っていないような……）

「おい、お前らこれ……」

「サツサと食えやアアア！！」

「ムゲツ…ゴックン」

銀時がついにある考えに達するも遅かった。痺れを切らした神楽が悪魔の実を銀時の口に勢いよくぶち込んだ。思わず一粒飲み込んでしまふ銀時。そして…

「ま、まずうううう!!」

外見通りあまりの不味さに銀時はしゃがみ込んだ。

「銀さん…大丈夫ですか？」

「銀ちゃん!! どう? どう? 変化したアルか？」

二人はしきりに銀時に聞いた。銀時は不味さから復活するとまず髪を触った。残念ながら普段通りのクルクル天然パーマだ。次に身体をペタペタ触る。そしてあることに気付いた。

試練4の戦いで骨折した骨が治っているのだ。体力も回復している。

「あー、なんか…健康体？」

銀時が呟くと新八と神楽は顔を見合わせる。すると新八が思い出したように言い出した。

「そういえば、僕日記に封筒が挟まってあるの見たんでした。何か書いてあるかも…」

新八の言葉に三人は4階へと戻った。

4階に着くと三人は日記へと向かう。銀時は日記を拾いそこから封筒を取り出し中の紙を広げた。

「これは…」

銀時の呟きに新八と神楽は銀時の横から封筒から出て来た紙を見る。そして三人そろって叫んだ

『なんだこれエエエ!!』

第9訓 あー…これ、悪魔の実っていうよりアレじゃねえ？（前書き）

はい、皆様お待たせ致しました。

お待たせしたわりにはあまり長くなって申し訳ありません！

っと今回からあとがきで質問コーナーが出来ました。

皆様、質問がありましたらご遠慮なさらずドシドシとどうぞ♪

第9訓 あー…これ、悪魔の実っていうよりアレじゃねえ？

三人は驚いて叫んだ。

『なんだこれエエエ！！』

「…って…どんな始め方ですか？これ…」

新八は小説の始まり方に些か不満があるらしい。ボソツと呟いた。

「何って…アレだろ？DVD見てる時ちよっとトイレ行きたくなつて一時停止ボタン押してスツキリして再生ボタン押したみたいな」

「例えが長えよ！！大体こんなに時間空いとしてトイレ休憩です。つかどんだけ長いんだよ！！」

銀時の言葉に新八が怒鳴るように言った。そんな新八に神楽がなだめるように言い出す。

「まあまあ、新八落ち着くネ。仕方ないよ、今回はこの馬鹿作者…短編小説書いてたアル」

「そうだな。連載小説放り投げて書いてたよな」

神楽の言葉に銀時はうんうんと頷いた。新八はそれをチラッと見る

とため息をつく。

「まあ。それは知ってますけど……ほんと自分勝手過ぎですよ。読者の方々待っていてくれるのに……」

「確かにそうだけど、仕方ないんじゃない？ アレは記念小説だしよオ……時期ずらすの嫌みたいだし」

「はいはいはい、私は満足ヨ！！出番たくさんもらったネ」

二人の言葉に神楽は手を上げながら言った。そんな神楽に銀時と新八は顔を見合わせた。

「ま、まあ……俺も出番多かったし？……良かったと言えば良かったけど……なんであばずれとオオオ！！」

「銀ちゃん、それツツキーも言ってたネ。もう、絶望してたアル」

「絶望だア？俺のほうか絶望したいわ！！」

「何言ってるアルか！！馬鹿作者は大満足に書いてたヨ。もう、ウキウキヤ言ってるマジキモイんだよ！！って感じだったアル」

「うわぁ……何それ、マジヤバいじゃねえか」

神楽の言葉に銀時は引き気味に顔をしかめた。ナレーシヨンはちょっと泣きそうになった。

「はぁ、二人とも……それぐらいにしといて下さい。あまりナレーシヨンを苛めるもんじゃないですよ！！……」

駄眼鏡はナレーションのフォローに回った。

「オイイイ！！フォローした人間に駄眼鏡はねえだろ！！駄眼鏡は！！……まあ、とりあえず…今回の小説は僕も良かったと思いますよ。出番たくさんありましたし」

新八の言葉に二人は同時に首を傾げた。

「え？新八居たっけ？」

「居たわアア！！きちんと居ましたよ！！」

新八は叫ぶも二人には記憶がないようだ。

「あー…まあ、新八居たかどうかは馬鹿作者のマイページから短編開いて調べてくれ…ってことでページ埋まったしそろそろワン魂始めろぞ」

「え？あつ、はい」

「始めるアル！！」

そう言うつと三人は定位置についた。

「あー…読者の皆さんよオ。わりいが、その再生ボタン押してくれねえ？あつ、その赤いボタン……は自爆装置なんで絶対押すな…」

ポチッ

『自爆スイッチ入りました』

「あつ、銀ちゃん…手が当たって押しちゃったアル」

「オイイイ！！なんでお前が押してんだアアア！！」

ドッカーンッ！！

銀時の叫び声と共に爆発音がなり響いた。

しばらくお待ち下さい。

三人は紙を見つめ、叫んだ。そう、紙に書かれていたのは悪魔の実際の…領収書だった。

「た、高え…何これ？何この値段」

「ゼロがアアア！！ゼロが半端ないアル…うおえええ」

「神楽ちゃん！！ぎ、銀さん大変です。あまりの高さに神楽ちゃんが吐きました」

新八は神楽の背中を擦りながら銀時に言った。しかし銀時は震えた

手で領収書を持って首を振った。

「いやいやいや、ナイナイナイ。こんな高いとか…印刷ミスだろ。だって…こんな高いなんて…俺…俺…うおえええ」

「ぎ、銀さあああん！！あんたまで何吐いてるんですか！！」

銀時と神楽は悪魔の実際の値段の高さによる緊張感で絶え間なく吐いた。新八は交互に吐く二人の背中を撫で続けた。しばらくして、二人は落ち着いたようだ。

「全く…二人ともしっかりして下さいよ」

新八はため息混じりに呟いた。そして領収書を律儀に封筒の中に入れてようとした。

「あれ？」

新八は首を傾げる。封筒の中にはもう一枚紙が入っていたのだ。

「銀さん、どうやらもう一枚紙が入ってるみたいです」

銀時は新八の言葉に微かに眉を寄せた。

「オイオイ、勘弁しろよ。これ以上吐くと口から臓器的な物が出ちまうぞ」

「マジでか。それ私嫌ネ。臓器的な物の出た人物と一緒に居ると私の臓器的な物も反応して出てきてしまうアル」

「出ねえよ！！そんな臓器的な物出たらホラーだろうが！！」

二人の言葉に新八は突っ込んだ。そして封筒から紙を取り出して広げた。

「あつ…どうやら、悪魔の実の説明文みたいですね」

新八の言葉に二人は顔を見合わせた近付いた。そんな二人を見ると新八は紙に書いてある内容を読み始めた。

「えっと…伝説の悪魔の実、アップアップの実について…この実は通常の悪魔の実とは少し違う。そこが伝説と言われるところだ。この実を食べた者は全ての能力が上がる。しかもピンチになればピンチになるほどその時必要な能力が一つだけ上がっていく。その上がっていく能力にはきりが無い。しかし急激に能力をあげるため副作用がある…だそうです」

「その…副作用ってのは？」

銀時は新八の言葉に眉を寄せて聞いた。

「書かれていませんね…あつ、けど治癒力が上がるのでどんな不治の病も怪我也治してしまうから莫大な値段がついてるみたいです」

「なるほど…」

新八の言葉に頷き銀時は自分の身体を見つめた。すると神楽がボソツと呟く。

「よく分からないけど…ドーピングみたいなものアルか？」

「いやいやいや、確かに似てるけど…神楽ちゃん、それは言ったらダメみたいだよ」

神楽の言葉に新八は苦笑いを浮かべた。すると銀時がため息をついた。

「どっちにしろ、ドピドピの実だかヤクヤクの実だか知らねえけど…サラサラにはなんねえってことかよ」

「いや、アップアップの実だから。あんたもドーピングだっと思ってんのかよ！…大体サラサラとかまだ諦めてなかったんですか…」

新八は呆れたように呟くと紙を封筒へと戻した。

「諦めれるわけねえだろ！！サラサラは俺の夢だぞ、夢！！」

「銀ちゃん、夢は叶わないから夢って言うネ」

銀時は拳を上げて言うも神楽の言葉を聞き落ち込んだ。そんな銀時を慰める神楽。二人の様子に新八はため息をついた。

「それより、早く町に帰りませんか？このまま上に行くと町への近道になるみたいですよ」

新八の言葉に神楽は即座銀時を慰めるのをやめた。そして階段に向かう。

「銀ちゃん、新八。早くするネ！！」

二人を急がせるよう階段の前で手招きした。三人は階段を上がり最上階へと向かった。

第9訓 あー…これ、悪魔の実っていうよりアレじゃねえ？（後書き）

【教えて、銀ハセンサー！！】

銀ハ「どーも、銀ハです。いや、なんか今日から質問コーナーが出来たとか…マジ面倒くさ…」

新八「コラアアア！！いきなり何言ってるんですか…あつ、今回のアシスタントの新八です。っと…とりあえず始めて下さいよ」

銀ハ「はいはい。それじゃあ…HN、soliaさんからの質問です。
『新八は今の実力では銀さんや神楽ちゃんと違ってこの『ONE PIECE』の世界で戦い抜いていくのは正直言って難しいと思うけどどうすんの？』だとよ、新八」

新八「いや、僕に聞かないで下さいよ。どうなんですか？先生」

銀ハ「はい、お答えしましょう。色々考えていますが…この小説では、多分新八はあまり強くしません！！何故かというところ…万事屋メンバーと麦わら一味を比較して見たらわかります」

（カキカキと黒板に書き込み）

銀ハ「はい。皆分かると思いますが、銀時はルフィです。悪魔の実保有者なので…神楽はゾロ、サンジです。悪魔の実無くて強いので…新八はウソップです」

新八「…あの、理由は？」

銀八「もちろんありません！！それでは、s o l a さん…廊下に立
つてなさい！！」

新八「理由ないのかよ！！つか…立たせるなアアア！！」

第10訓 最後の最後まで試練のようなもの（前書き）

できた。

…うーん？わかり辛い展開になったなあ…

…ってか…後書き自分の携帯では千文字しか無理だから焦った！
今度から長い時は質問コーナー本編に入れます

第10訓 最後の最後まで試練のようなもの

三人は最上階に登った。そしてドアを開ける。見えたのは…レールと木でできた箱のような乗り物。

「何アルか？これ…」

神楽はぱちくりと目を見開いた。そんな神楽をよそに銀時はじつとレールと乗り物を見つめる。

「こいつア…トロッコか？」

「トロッコ？…何アルか、それ」

銀時の呟きに神楽が反応した。すると銀時の代わりに新八がしゃべりだす。

「神楽ちゃん。トロッコってのはね…レールにそって走る車のようなものだよ」

「車？」

「うん。スピードは違っけど…ジェットコースターのスピードが遅いバージョンかな？」

新八は神楽が分かりやすいであろう例えを出して説明した。

「マジアルか！！銀ちゃん、新八乗るネ」

神楽はキラキラと瞳を輝かせ、トロツコへと向かった。銀時と新八は顔を見合わせてついて行く。

神楽は埃だらけの車に乗り込んだ。そして早くこいつと銀時と新八を見つめる。

「オイオイ、こんな怪しいのに乗っていくのか？」

「そうヨ、楽しそうネー！」

銀時は嫌な予感がするのか微かに眉を寄せた。しかし、神楽はじつと銀時と新八が乗るのを見つめる。

「銀さん、どうしましょう？」

新八が困ったように銀時を見た。銀時はガシガシと頭を掻いて仕方なさそうに呟く。

「……まったく、仕方ねえなア」

銀時の言葉にパアツと表情を明るくし嬉しそうにする神楽。そんな神楽を見ながら銀時は頭を撫でた。新八はそんな二人の様子を見てクスツと笑う。

「あ？なんだよ？」

新八の様子に気付いた銀時は車に乗りながら聞いた。すると新八も車に乗り込んだ。

「いえ、相変わらず銀さんは神楽ちゃんに甘いって」

新八はクスクスと笑う。そんな新八に銀時は眉を寄せた。

「うるせえ」

銀時は不服そうにボソツと呟いた。

「新ハイ、銀ちゃんが可愛い神楽ちゃんにメロメロなのは仕方ないネ。…っと行くアルよ。出発しんこーう!!」

そんな二人を神楽はチラチラとしばらく見つめた。しかし我慢出来なかったのだろう…トロツコを発進させる。

動き始めたトロツコに気づくと銀時と新八は一旦黙った。

「誰がメロメロだ…って、速い速い速い!!何これエエエ!!」

思った以上にトロツコのスピードが速かったのだ。銀時は驚き声を上げた。

「キャッホーイ!!」

神楽は両手をあげて大はしゃぎ。

トロツコは走る走る…ものすごいスピードだ。

ふと、前を向いてトロツコの行く先を見ていた新八が目を見開き銀時に伝えた。

「銀さん…レールの先が…」

新八の言葉に銀時は言葉を予想して青ざめた。

「オイオイオイ、まさか無いのか！？レールの先ッ！！」

「いえ、無いんじゃないくて……………何故か勢いの良い濁流が流れてます」

銀時の言葉に新八が首を振り否定をした。銀時はホッと息を付いた。どうやら最悪なベタベタ展開からは逃れたようだ。しかし…新八の次の言葉に思わず叫んだ。

「なんでだアアアア！！」

銀時が叫ぶもトロツコは勢い良く濁流へと入って行った。もちろんレールから外れて濁流に流されるトロツコ。

「殺す気だアアア！！クリアした奴も溺れさせて殺す気だったんだアアア！！」

銀時はカナヅチなので大慌てである。ちなみに神楽はジェットコースターの次はウォーターライダーアルかつと喜んでいた。

「お、落ち着いて下さい。だ、大丈夫ですよ。僕たちトロツコに乗ってま……………」

新八は銀時を落ち着かせようとして言った。しかしその言葉は最後まで続かなかった。

「し、新八？」

銀時は静かになった新八を見て首を傾げる。すると新八は慌てたよ

うに大声を出した。

「オイイイ！！冷たいと思ったら水入ってきてるウウウ！！」

新八の言葉に再度銀時は青ざめて下を見る。確かに水が入ってきている。銀時と新八は慌てて手を器の形にして水を出す作業を開始した。

その時大喜びしていた神楽が話しかけてきた。

「銀ちゃん……この先、滝ネ」

「ちょ…神楽ちゃん。今銀さん忙しいから黙っ……え？滝？」

銀時は神楽の言葉に目をパチパチとさせ神楽の言っ通りトロツコに行く先を見た。その先には道も水も無く…ゴゴゴゴオっと音を立てながら勢い良く水を落ちていた。確かに滝である。

「オイイイ！！ダブルパンチならぬダブルピンチじゃねえかアアアア！！」

銀時が大声で叫ぶと新八が手を休めずに言い出した。

「ぎ、銀さん！！ピンチと言えば悪魔の実！！何か脱出出来そうな能力上がってないんですか！！」

そう、銀時の食べた悪魔の実はピンチの時にこそ能力を発揮する。銀時は ボタンを押しドラクエのようにつよさを確かめ始めた。

「銀さん…どんな調べ方ですか…」

「いや、こっちの方が早いだろ」

言いながら銀時はつよさを確かめる。しかし上がっている能力が中々見つからない。銀時が首を傾げながら探していると神楽がある能力を指差した。

「銀ちゃん、これ…ゆっくりと上がってるヨ」

「あつ、ほんとですね」

新八も見ながら頷いた。ゆっくりだが確かに上がっている能力がある。その上がっていた能力は… ツツコミ力だった。

「オイイイ！なんでツツコミイイ！？こんな状況で上がってどうしろって言うんだアアア！」

銀時は頭を抱えて叫ぶ。まるで新八のようなツツコミだ。

そうこうしている内に滝はもう目の前に迫っていた。そして、どうすることも出来ずに三人の乗ったトロツコは落ちていった。

滝から落ちてなんやかんやと色々大変なことがあったが三人はボロボロになりながらも町まで戻ってきた。

「銀さん…無事帰ってこれましたね」

「そうだな」

新八と銀時は顔に手を当て感涙。よっぱど酷い目にあつたようだ。神楽はボロボロながらも楽しんでいたのだろう。二人を見てため息をついた。

「銀ちゃん、新ハイ。いつまでも感涙しないで早く行こう!! 私お腹ペコペコネ」

神楽は二人を急がせようとする。そんな神楽に二人は頷いた。三人が向かっているのはこの町の酒場。そこにハンド海賊団たちが行くと言っていたのだ。

「そういえば…銀さん…なんか町の様子変じゃありません?」

「確かに…なんかビクビクしてるヨ」

新八が歩きながら言う。神楽も気になっていたのだらうコクンツと頷いた。そんな二人に銀時はガシガシと頭を掻いた。

「さあな。今日はビクビクする日なんじゃねえの?」

「いや、そんな日ねえよ」

銀時の言葉に新八がきっぱりと言った。

三人は不思議に思いながらも歩いて、酒場にたどり着いた。酒場の中も何故かビクついた人たちでいっぱいだった。ハンド海賊団たちは居ないようだ。

銀時は酒場の中を歩いてマスターの近くまで行くと尋ねた。

「あのよオ、ハンド海賊団って奴ら来なかったか？」

銀時が聞いた瞬間。酒場の中の人たちがビクついた。マスターはビクビクとした状態で覚悟を決めたように口を開いた。

「あ、あんたら…あの海賊団の知り合いなのか？」

三人はコクンツと頷いた。

「あ、あの海賊団は…」

「うわあああ!!」

「関係ない…俺は関係ないんだ!!」

マスターが話そうとした瞬間。店から客が叫び声を上げながら逃げだした。

三人は驚き目をぱちくりとさせる。

「な、なんですか？これ…」

新八がキョロキョロと辺りを見渡す。もう酒場には三人とマスターしか見当たらない。

「あんた達の探している海賊団たちは、みんなピエールに連れて行かれた」

「ピ、ピエール？誰だそりゃ？」

聞いたことない名前に首を傾げる銀時。そんな銀時にマスターは話
しだした。

「この島。いや近くの島はある島々は、その海軍基地の管轄内にあ
る。いや、その海軍基地に莫大な金や食品を払い…海賊の侵略のよ
うに支配されていると言っても過言ではないだろう。その海軍基地
の主。それがピエールだ」

「なるほど…けどよオ。なんであんな急いで逃げ出したんだ」

銀時は不思議そうに首を傾げた。

「そ、それは…」

マスターが口を開くと同時にバターンッ！！と大きな音を立て酒場
のドアが開いた。

「貴様か！！我らが主ピエール大佐の名前を口にしたのは！！」

その声に三人はドアの方を向いた。軍服を着た5人の人物が立って
いた。

5人の中の真ん中の一人がマスターをじっと見つめ、再度口を開く。

「この町の決まりにより、貴様を逮捕させてもらっ」

「ちょ…ちよつと待って下さい。別にこの人は名前を言っただけで」

「そうヨ、いきなり逮捕とか何様ネ!!」

新八と神楽は納得出来ないと口々に言った。

「黙れ!! 貴様らは余所者だな。ピエール大佐は被害妄想が激しい。名前を言われただけでも悪口だと勘違いする。よってこの町の住民はピエール大佐の名前を軽々しく口にしてはいけないのだ!!」

きつぱりと言うとマスターに近付こうとする海軍。

そんな海軍に立ちふさがる三人

「オイ、テメーふざけんなよ。そんな理由で逮捕とか馬鹿も休み休み言いやがれ!!」

銀時が三人を代表してきつぱり言った。海軍たちはキツと睨みつけてくる。

「き、貴様ア…俺たちが思っても言えないことをあつさりと!! 余所者だろうと容赦しないぞ!!」

「あつ、やっぱ思ってたんだ」

新八はボソツと呟く。すると海軍たちは三人に襲いかかってきた。銀時は木刀を抜くと思いい切り振りぬく…その勢いで三人一気に倒した。神楽は傘を振り回し二人倒す。新八はその様子を見ていた。

一瞬で五人を倒した銀時達は、マスターの方向を向いた。

「わりいけど…その海軍基地どこにあんのか教えてくれねえか？」

銀時の言葉に呆然と海軍の様子を見ていたマスターはコクコクと頷いた。

第10訓 最後の最後まで試練のようなもの（後書き）

【教えて、銀八センサー！！】

銀八「はい、今日も始めました。銀八コーナーでえーす。最初の質問は…HN、プリニールハールさんからの質問です。『悪魔の実は何なのかを教えてください』……根本的な来だな。オイ」

新八「そうですね…けど僕も悪魔の実って何か根本的に分かりませんよ」

銀八「奇遇じゃねえか。先生も分かりません！！」

新八「ちょ…ダメじゃないですか！！質問どうするんですか？」

銀八「大丈夫だ。ゲストを呼んできたからよオ」

（ペラッとゲストカーテンをめくり）

？「いや、やっとな番か？」

新八「ちょ、ちょっとオオオ！！どうやって連れてきたんですか！！赤髪のシャンクスさんじゃないですかアアアア！！」

銀八「いや、酒場で意気投合してよオ。どうせなら最初に説明した本人をと」

シャンクス「銀八、まだしゃべったらいけないのか？」

銀八「ん？…あつ、いや…どうぞ」

シャンクス「コホンっ…いいか！！悪魔の実はな…海の秘宝と呼ばれる実なんだ！！食べば様々な能力が手に入る！！そして一生泳げない体になっちまうんだ！！…ってわけで飲みに行くぞ」

（銀八の肩に手を回し）

銀八「そうだな！！じゃあ新八あとよろしく」

（酒場に向かって歩き出し）

新八「よろしくじゃねえよオオオ！！…ちょ、ぼ、僕一人で回すんですか？…えっとHN、銀皿さんからの質問です。『今現在新八って役に立ってますか？』って立ってるわアアア！！何この質問も…ふぐはっ」

神楽「ホワチャアア！！」

（新八に跳び蹴り）

神楽「銀ちゃんの代わりに答えるアル。新八の役立ち度は道端の雑草並みネ」

新八「え？何…雑草って…」

神楽「次の質問に移るヨ。HN、伽藍礮臣さんからの質問ヨ『銀時達に質問。今歌舞伎町での心配事は？』

・新八に質問。どんな悪魔の実があつたら食べてみたい？
目が良くなる実とか？（笑）『…私は定春のことが心配ネ。銀ちゃんの家賃じゃないアルか？』

新八「僕は姉上のことですかねえ？…って悪魔の実…やっぱり人

気が上がる実とか…」

神楽「ケツ…悪魔の実でも無理ネ」

新八「ちよっ…辛辣ウウー!!」

神楽「それじゃあ、次回もよろしく頼むヨー」

第11訓 小説とは都合良く出来ているものである（前書き）

お待たせいたしました。

やっと出来上がりです。ちなみに質問コーナーは前の話で言ったり本編の後に載っています。

それではどうぞ

第11訓 小説とは都合良く出来ているものである

あの後…銀時たち一行は、酒場のマスターに海軍基地は別の島にあると聞き港に来ていた。

「銀さん…港に来たのはいいんですけど…船どうしましょ…」

「島まで泳ぐアルか？」

新八と神楽は銀時をじっと見つめて言った。銀時は少し困ったようにガシガシ頭を掻く。予想とは違ってハンド海賊の船がなかったのだ。

（オイオイ、まさか船ごと持って行かれたのかよ）

銀時は海を見つめ眉を寄せた。新八の言う通り船がない。そして神楽にはしつこいほど何度も何度も悪魔の実の共通副作用を教えてやりたい。

銀時はため息をついた。その時銀時の…いや、三人の頭の中に聞き慣れた声が響いた。

（どうやら、困っているようだな。我が主銀時とゆかいな仲間たちよ）

「いや、ゆかいな仲間たちって何!？」

聞こえてきた声にいつものように突っ込む新八。

「「お、お前は……エロ仙人!!」」

そして銀時と神楽は同時に呟いた。

（エロではなーい！！洞爺湖だ！！洞爺湖仙人だ！！）

「いや、エロ仙人だろ」

（いやいや、違うから！！大体我のどこがエロ仙人だと…）

「「キャバクラで通信するところ（アル）」」

洞爺湖仙人は二人の言葉を聞き、言葉を詰まらせた。もし、この場に洞爺湖仙人が居たら蔑んだ目で銀時と神楽に見られているだろう。新八をそう思い苦笑いを浮かべた。

「と、ところで洞爺湖仙人さん…何の用ですか？」

新八は聞くと洞爺湖仙人はコホンッと咳払いをし口を開いた。

（うむ。よくぞ聞いてくれた…実は我が主が困っているのではないかと思います）

洞爺湖仙人の言葉に三人は顔を見合わせた。

「ちょうど良かったです。実は今困ったことになっていて…」

「おい、新八やめとけ…嫌な予感しかしねえよ」

新八が洞爺湖仙人に相談しようとするすると銀時が止めた。

（銀時は…この私が信じられないというのか！！）

「ああ」

「信じられるわけないネ」

洞爺湖仙人の言葉に銀時と神楽は即答した。すると洞爺湖仙人は壊れたように笑いだした。

（くくくつ、くはははつ。私も舐められたものだ！！…確かに以前の私では出来ないであろう…しかし私は自ら修行をし生まれ変わったのだ！！）

「…な、何イイイ！！う、生まれ変わったと！？」「」

「どうでもいいですけど…あんたらキャラ変わってねえ？」

洞爺湖仙人の言葉に銀時と神楽はワザとらしく驚く。そして新八は突っ込んだ。

（そうだ。あれは…厳しい修行だった）

洞爺湖仙人がしみじみと呟いた時、三人の頭の中にその修行映像が浮かんだ。洞爺湖仙人の思ったことがテレパシーされたようだ。ちなみに修行内容とは…まず、現編集長を酒に酔わせ簞巻きにして川に捨てる。そして編集長が行方不明になったとさくさに紛れて編集長になるという映像だった。

「た、確かに…すげえ修行だ」

「ほんとネ、お前エロいだけじゃなかったアルな」

銀時と神楽は頭の中で映像を見るとうんうんと頷いた。

「いやいやいや、可笑しいだろオオオ！！これ修行じゃなくて事件！！殺人事件」

映像を見た瞬間ショックで新八のメガネがパリーンと割れた。
そして大きな声で突っ込んだ。

「（殺人事件？そんな大袈裟な）」

「大袈裟じゃねえよ！！」

そんな新八に残った三人はナイナイと首を振った。
新八と三人…どちらが正しいのであろうか。

「とりあえずだ。お前は編集長になったわけか…」

（うむ。そういうことだ）

銀時は考えるように眉を寄せた。普段なら役に立ちそうにない洞爺湖仙人だが…編集長になれば役に立つのではないだろうか。銀時はイチかバチか今の状況を伝えた。

（なるほど…つまり銀時は船が欲しいというのか）

納得した。洞爺湖仙人の声が頭に響く。三人はコクンッと頷いた。

（分かった…では、船とログボース…そして航海士をつけよう）

「ログボース？なんですかそれ？」

新八が不思議そうに首を傾げた。

（この海では磁気異常により、正確な方角が解らない。よってログボースとは次の島を教えるコンパスのようなものだ。このログボースには弱点があり、決まった島にしか行けない。しかし…お前たちに渡すのは特殊なログボース…）

「特殊だア？」

銀時は洞爺湖仙人の言葉に眉を寄せた。すると洞爺湖仙人は真剣な声で言った。

（うむ。この海…グランドラインは危険過ぎる。舐めてかかると痛い目どころか全滅だろう。なので特殊なログボースを渡す）

洞爺湖仙人の真剣な声に三人は顔を見合わせた。そして覚悟を決めたのだろうか真剣な表情で洞爺湖仙人の言葉を聞いた。

（それでは、まずは船と航海士を渡そう）

洞爺湖仙人が言うとももなかった海がひかり、船が現れた。大きさはメリー号くらい、帆や旗は当然何もかかれてなく真っ白だ。

「すごいアル！！」

「へえ、なかなかじゃねえか」

神楽はキラキラと瞳を輝かして嬉しそうに言った。銀時も船を見つめ満足そうにしている。

「それにしてもすごいですね。そういえば…航海士はどこなんですよ?」

「そついや、そつだな」

新八の言葉に銀時もキョロキョロと船を見つめた。すると船の上から聞き覚えのある声がした。三人は声のした方向を見る。そして声を揃えて言った。

「『チエンジで!』」

「いや、銀さん…奇遇だなア」

航海士が船の上から降りてきた。

航海士はまるつきし幸の薄そうなたングラスをかけダメオーラをまとった男…マダオだった。

「いや、奇遇というか…長谷川さんは何してんだ?」

「俺か?俺はやっと仕事を見つけたわけよ。航海士という名の…し

かし、まさか銀さん達の航海士とは世間は狭いなア」

はははっと笑う長谷川に眉を寄せる銀時たち。

「長谷川さん…航海士なんて出来るんですか？」

「そうヨ！！マダオに海の道案内なんて出来るアルか？ただでさえ人生の道に迷っているのに…」

新八と神楽は心配になり聞いた。神楽の言葉は少し辛辣だった。

「相変わらずの辛辣だね。嬢ちゃん…大丈夫だ！！海は得意なんだよ俺！！」

きつぱりと言う長谷川に新八は銀時をじっと見つめた。

銀時はガシガシと頭を掻いた。

「まあ、大丈夫だろ」

「銀さんがそう言うなら………そういえば洞爺湖仙人さん静かになっちゃったんですけど…どうしちゃったんでしょう」

神楽がマダオに辛辣な言葉を浴びせているのを見ながら首を傾げた。確かに先ほどから静かである。

「あー、…おーい。洞爺湖仙人」

銀時は眉を寄せて呼んでみた。しかし返事がない。

「…返事ねえな」

銀時がそう呟いた時、再度頭の中に声が響き始めた。

（もう、洞ちゃんってば…冗談ばかり）

（いやいや、私は本気だよ？これからもリサちゃんと一緒に時を過ごしたいと思ってる）

（洞ちゃん…いえ、洞爺湖さん…ごめんなさい。そっいつ指輪は受け取れないわ）

（リサちゃん…）

プツンと音を立てて声が再度聞こえなくなった。

「銀さん…なんですかこれ？」

「プロポーズネ、見事玉砕したアル」

新八と言葉にマダオいじめをしていた神楽はしみじみと呟いた。銀時はため息をつく、そしていつもより優しげな声で言った。

「まあ、あいつのことは暫くほっといてやろつや」

「そうですね」

その言葉に新八、神楽、長谷川はコクコクと頷いた。

【教えて、銀ハセンサー!!】

はい。毎度お馴染み銀八です。今日は突っ込みなしの一人でやるみたいなんで…まあよろしく頼むわ。

まずは一つ目、HN、アニメ冒険家さんからの質問です。『銀さんはちゃんとワンピースの物語を知ってるんですか？あと銀さんはワンピース誰が好き？』

はい。お答えしましょう。一応どんな話かと主人公は知っています。銀時はジャンプ読んでるしな…けど話の展開が一緒とは限りませんそうだな…やっぱナミじゃねえ？あの胸すごいしよオ
(手で胸の大きさを表し)

じゃあ次な。HN、魔王ラハール(プリニーラハール)さんの質問です。『どんな能力が有るのか教える!』

…うーん？先生はあまり詳しくねえけどよオ。かなり種類あるぞ…麦わら一味でいうと、ゴムゴムの実、ヒトヒトの実、ハナハナの実、ヨミヨミの実だな。

他にもバラバラとかスナスナとかがあるらしいぜ

よし、次。HN、灘さんの質問です。『万事屋三人の思っていた海賊イメージ図などはあった?』

これは…やっぱ江戸の海賊っていったら春雨だしよオ。春雨のイメージなんじゃねえか?

はい、次な。HN、solaさんからの質問です。『現在の銀さん・神楽ちゃん・新八3人の強さはどの位ですか?』だそうだ。

あー…なるほど…新八は…まあ、懸賞金5千万ベリー以下なら頑張れば倒せるかもな。神楽は…懸賞金1億ベリー以下ならいけるだろ。銀時は…うーん?普通の状態だったら…2億ベリー以下なら…白夜叉モードになったらまあ、ギリギリ死にかけて新型パシフィスタが倒せる…かもしれねえ。

ちなみにあれだわ。旧型パシフィスタに苦戦とあったけどよオ。それは新八の考えと客観的に見た感じです…

銀時は本気出す前に新八助けてやられちゃったしな

じゃあ、最後。似てる内容だったんで纏めさせてもらったわ。HN、エターナルさんとHN、まっちゃんさんの質問です。『麦わら海賊団はいつ出て来ますか?というより出るんですか?』と『ルフィとか麦わらのいちみは出てこないんですか???』だな。

はい。お答えします!!まず…麦わら一味ですが…出ます!!…この作者はルフィ好きだから絶対に出るぞ。

ちなみに出てくるのは…この海軍基地編が終わったらすぐだ。今はほら、出したくてもあいつ等空島いるから出せないんだよね

それじゃあ、質問くれたお前ら全員廊下に立ってるように！
（ビシッと指を差し）

第12訓 とりあえず進もう（前書き）

お待たせいたしました。更新です！！

最近スランプ中で…更新遅れますが、見捨てないでやって下さい！

そして…今回ほんと中途半端な終わりに…最初に謝ります。ごめんなさい

第12訓 とりあえず進もう

「それで？銀さん、これからどうするんですか？…洞爺湖仙人さんが立ち直れるまで僕たち動けませんよ」

そう新八の言う通り洞爺湖仙人がログポースをくれない限り動けないのだ。しかし、そのことを分かってない長谷川は首を傾げた。

「え？動けないの…なんでだ？銀さん」

「あー、そりゃ…面倒くせえ。新八…説明任せ…いや、任せるのも面倒くせえ……かくかくしかじかだ」

銀時は頭を掻きしばらく考えるときっぱりと言った。

「ちょ、どんだけ面倒くさいんですか！！ってかそんなんじゃ分かりませんよ！！」

「なるほど、そういうことか」

「ええええ！？分かったの！？分かつちゃったのオオオ！？」

新八は二人の会話に思いつきり突っ込んだ。すると長谷川は得意げにサングラスをあげた。

「甘いよ、新八くん…ギャグ漫画や小説のお約束だろ」

「いやいやいや、ギャグ漫画や小説のお約束って…確かにそうです」

けど」

長谷川の言葉に新八は突っ込もうとするも納得してしまった。

「……」

「……」

銀時と長谷川は珍しく突っ込みを失敗した、新八をじっと見つめた。新八はだんだんと二人の視線から目をそらす。するとその時船の中から神楽の嬉しそうな声が聞こえた。

「キャッホーイ!!」

三人は顔を見合わせ声ができる方向を見ると神楽が居るであろう船の中へと向かった。

三人は船の中に入ると神楽を探した。そしてある一部屋に神楽の音がするのが分かった。新八はドアを開けた…そして目をまん丸くして驚く。

「神楽ちゃ…エエエエ!？」

「ん？嬢ちゃんは見つかったの……」

長谷川は新八の後ろから部屋の中を覗き込んだ。そして新八どうよう驚いた。そんな二人を見ていた銀時は眉を寄せた。

「オイオイ、何をそんな驚いて……ん？定春？」

銀時は見えやすいように先ほどよりドアを開けて新八の隣で部屋の中を見た。

部屋の中では、神楽がふわふわとした白い大きな犬に抱きついていた。万事屋に飼っているペットの定春だ。

神楽は三人が入ってきたのを見ると嬉しそうに言った。

「銀ちゃん、定春が導いてくれるネ」

「あ？」

神楽の言葉に銀時は首を傾げた。そして定春の首にかかった板を見て何故新八と長谷川さんがあんなに驚いたのか分かった。

「し、新八…銀さんちよつと聞きたいんだけど…この海で必要な物ってなんだっけ？」

「ログポースです」

「じ、じゃあ…定春の首にかかった板に書かれてるのは？」

「『ろぐぽおす』です」

そう、定春の首にかかった板にはきつたない字で『ろぐぽおす』と書かれていた。銀時は流石に苦笑いを浮かべる。

「いやいやいや、ナイナイナイ。これは無いって」

「そうですね、銀さん…さっき洞爺湖仙人さんこの海はなめちゃダメだって言っていましたし」

「そうだ！！新八…これは流石に無いだろ」

「うん、無い無い。無いですよ」

銀時と新八はあつははと笑い始めた。そんな二人の様子に不思議そうに神楽は首を傾げた。

「なんで、銀ちゃんや新八はあんな状態アルか？」

「お嬢ちゃん…人には現実逃避したいときがあるもんなんだよ」

神楽の言葉に長谷川は遠い目をして呟いた。神楽はチラッと長谷川の方を見るとボソッと呟く。

「ふうーん…そうアルか。じゃあ、お前は…毎日現実逃避ばかりしてるダメ男。略してマダオアルな」

「嬢ちゃん…相変わらず辛辣だな」

長谷川は神楽の言葉に、片手でサングラスの上から目を覆い一滴の涙をこぼした。

それからしばらくして…一行は進むことにした。なんと定春にハインド海賊団の匂いのついた物を嗅がすとある方向を向いて鳴き出したのだ。

四人は定春の鳴く方向に向けて船を進めて行つた。しばらく順調に進めて行くと…突然定春の動きが止まつた。

「定春？どうしたア…っ!？」

神楽は定春を心配するも突然通つてきた臭いに鼻を押さえた。

「神楽ちゃん…どうし…うつ」

「二人ともどうし…ッ」

新八は神楽に駆け寄り、長谷川は二人に駆け寄り眉を寄せた。

「あー、久々に苦戦したわ」

銀時がお腹をさすりながらトイレから出てきた。どうやら出発前に食べた生クリームが傷んでいたらしい、先ほどまでトイレにこもり戦っていたようだ。

「オイオイ、お前らどうしたよ…船きちんと進んでるのか？」

戦いを終えてすっきり顔の銀時が三人と一匹に近付いた。三人と一匹は銀時を一瞬睨みつける。

「銀ちゃん」

「「銀さん」「

「ワン」

三人はにつこりと笑い銀時を呼んだ。銀時はそんな三人に首を傾げる。

「あ？なんだ……」

銀時は三人と一匹を交互に見つめた。そしてだんだんと顔を青ざめていく、三人から半端ない黒オーラが立ち込めているのだ。

「お、おい……お前ら……」

「「「死ねやアアアア！」」「」

「ウォーンッ！！」

「ぎ、ギアアアアアアッ！！」

三人と一匹は銀時に飛びかかった。海のど真ん中で銀時の叫び声が響く。

「いや、ホントお腹弱くてすいませんでした」

ボコボコにされた銀時は正座をしていた。お腹弱くて謝るのも可笑

しな気がするのだが…そのせいで海のと真ん中で遭難。その理由を怒っても仕方ないのだろう……多分。

「すいませんですんだら警察なんていないネ（特にサド）」

「オイオイ、警察がいない（特にマヨ）のは分かるが銀さんは大事だろうが…！」

「いないネ」

銀時と神楽はギャーギャーと言い争いをし始めた。そんな二人を止めようとする長谷川と新八。

「まあまあ…銀さんも嬢ちゃんも落ち着いて」

「そうですよ。いない人なんて居ないですよ（山崎以外）」

新八の言葉を聞くと三人はじつと新八を見つめひそひそと話した。た。

「オイオイ、聞いたか…神楽。新八の本心聞いちゃったぞ」

「うん、聞いたアル。怖いやつネ」

「これは…新八くん地味キャラは自分だけが良いみたいな感じかな？」

こそこそとしゃべる三人に眉を寄せる新八。

「なんですか？（山崎）なんなんですか？（居なくなれ）……って

何この（）オオオオ!!」

「何ってあれだろ？新八の本音」

（）に驚く新八に銀時はきっぱり言った。そんな銀時に慌てて首を振る新八。

「いやいやいや、（居なくなれ居なくなれ）本音じゃないですから!!…って（）付けんのやめろオオオ!!」

新八は（）に向かって叫ぶ。三人は白い目で新八を見つめた。

「いや、ほんと違いますから……ってか今はそれどころじゃないでしょう?」

「誤魔化した」

「誤魔化したネ」

新八の言葉に銀時と神楽はボソボソと呟いた。そしてまた白い目で見つめる。

「ちょ、いい加減にしてください。僕達遭難してるんですよ」

「遭難アルか？道に迷ったら人に聞くのが一番ネ。誰かアアアアアヘルプミー!!」

神楽は手を口に当てて大声で海に向かって叫んだ。

「ちょ、こんな海のと真ん中に誰かいるわけ…」

「なんだ？お前ら困ってるのか？」

「そう。困って……え？」

新八は声のした方を振り向いた。振り向くとある人物が船の縁に立っていた。その人物は帽子を被っており、その帽子には2つバツチのようなものがついていていた。そして服装は何故か上半身が裸でよく見えないが片手腕になにやら文字が刻まれている。顔にはそばかすがあるも整っていた。良い男部類に入るであろう。

第12訓 とりあえず進もう（後書き）

【教えて、銀八センサー！！】

銀八「はい、今日も始めました。質問コーナーです…もしかしたら今までとタイトルロゴ違うかもしれないが、気にすんな」

新八「先生…なんですか？いきなり」

銀八「いや、タイトルロゴ忘れたから（笑）それじゃあ、HN、soliaさんからの質問です。『さっそく質問ですが、銀さん達のワンピースの原作知識はどのくらいなんですか？（ログボースのことは知らなかったけど少なくとも悪魔の実とかの基本的な用語やある程度の世界観については知っているみたいですが）』とのことです。」

新八「あつ、それ僕も気になってました。所々知ってますよね」

銀八「あー…そうだな。これはアレだよ…銀魂の世界でもジャンプ漫画になってるから銀時は漫画で見た所まで知ってます。…けどあまり記憶が良いと言えないのでこの小説の作者と同じようにログボースなどの小難しい説明がある物は覚えません」

新八「先生エ、それはバカってことですか？ここの作者はバカってことですか？」

銀八「こら、新八ダメだぞ。そういうのはオブラートにつつめエ…けど否定はしねえよ。それじゃあ、soliaさん廊下に立ってる

「...」

第13訓 迷子の迷子の…（前書き）

お待たせしました。キャラ口調は本当にダメダメですが…まあ、どうぞ

今回はとある事情により質問コーナー【教えて、銀ハセンサー!!】を止めております。

しかし、質問は受け付けておりますので、お気軽にどうぞ

それでは、本当にお待たせしました。

第13訓 迷子の迷子の…

「え？ちょ…あなた誰ですか？どうやって現れたんですか？」

新八は目をパチクリさせて聞いた。周りにはその人物がいるだけで船などとは見当たらないのだ。

「おれは…」

男は何かを言おうとするもガツクンと頭を俯かせ立ったまま動かなくなつた。

「え？…ちょ、ちよつと…」

あまりのことに驚く新八。銀時と神楽と長谷川も驚いた様子で男を見つめる。

「銀ちゃん…なんかピクリともしないよ。死んでるみたいネ」

神楽が男を見つめながら言った。すると、反応したのは新八だ。

「神楽ちゃん、そんなわけないよ。まさか…立ったまま死んでるなんて…」

新八は神楽の言葉に否定するも…やはり男はピクリとも動かない。

新八は男の様子に不安になりチラチラと銀時を見つめた。すると神楽も同じように銀時を見つめ出す。

銀時は頭を掻きながらもゆっくりと男に近付こうと一歩踏み出した。

「銀さん！！ダメだ！！」

もう一步足を踏みだそうとする銀時を長谷川が止めた。

「あ？長谷川さん？」

銀時は不思議そうに長谷川を見つめた。神楽と新八を同じように見つめる。

すると長谷川は難しい顔をし、口を開いた。

「この話は…面接時に聞いたんだが…」

長谷川の話では、航海士面接時に洞爺湖仙人から、この近くの島では『砂漠のイチゴ』という赤いイチゴの実の様な姿をした毒グモがいるらしい。間違って口に入れてしまったら数日後に突然死ぬ。そしてその死体には数時間感染型の毒がめぐるとのことらしい。

「おい、じゃあ…コイツはその毒グモ間違って食ったって言うのかよ」

銀時の言葉に長谷川はコクンッと頷いた。

「その可能性が高い。見ろ…立ったまま死後硬直してる…どれだけ強力な毒なんだ。その砂漠のイチゴって奴は」

長谷川はサングラスを軽くあげると目を細めた。

「え？…ま、待って下さい。感染型って……」

「そう、近付くことが出来ない」

新八の言葉を銀時が続けた。深刻な空気が辺りを包む。すると、男がピクリと動いた…しかし、見たのは神楽のみだ。

「ぎ、ぎ、銀ちゃん！！銀ちゃん！！大変ネ。動いた…動いたアル」

神楽は慌てて銀時の着流しを掴むとグイグイ引っ張った。

「あ？…動いたって何がだよ」

銀時はチラツと神楽を見ると聞いた。新八と長谷川もいつもの神楽と様子が違うことに気付き様子を窺った。

「動いた。あの男動いたネ…」

神楽は男を指差しながら言った。その言葉に銀時、新八、長谷川は男を見つめた。しかし、動かない。

「別に動いてねえぞ。見間違いだろ」

「そうだよ。神楽ちゃん。死体が動くわけないでしょ」

銀時と新八が言うと神楽はブンブンと首を振った。

「違うヨ。確かにピクピク動いたアル…きっとお化けネ」

神楽の言葉に銀時の身体がピクツと動いた。

「おいおいおい、神楽ちゃん…お、お化けなんているわけ」

銀時が目を泳がせながら神楽の言葉を否定しようとしたその時…男の立っていたほうで何やらゴトと音がした。

「銀さん…何か音がしたんですけど」

新八が言っていると銀時は認めたくないのかブンブンと首を振った。

「いやいやいや、ないないない」

「銀ちゃん…怖いアルか？」

神楽が言っていると銀時は首を振りながら言う。

「怖い？え？何それ…銀さん怖いなんて感情しらねえよ。ほんと教えてもらいたいくらい…え？」

銀時が早口でしゃべるも途中で止まった。男のほうから…唸るような…不思議な声がしたからだ。

「何ですか？さっきの声。銀さん調べてみてください」

「ちょ…新ちゃん！！何言ってるの？近くに言ったら毒が…」

「遠くから調べたら大丈夫ネ」

新八の提案に毒を理由に否定をする銀時だが、神楽によってそれは阻止された。

「いやいやいや、なんで俺が調べなきゃいけないんだよ」

銀時が言つと長谷川を含めた三人がきつぱり言つた。

『この船の…船長だから』

三人の言葉に銀時は眉をよせた。何故なら船長になつた記憶がない。しかし、それを言つたとしても無駄に終わるだろう。

「だあああ！！分かつたよ！！調べればいいんだろ」

銀時はもう半分やけくそで叫ぶと、深呼吸をして男の方へと振り向いて見た。

男の様子は先程となんら変わりなかった。銀時はホツと息をついた。しかし、その瞬間…男は俯かせた顔をガバツと上げた。

「いぎやあああッ！！」

銀時は叫ぶ、すると驚いた三人も男へと振り向いた。

『銀さん（銀ちゃん）どうし……ギャアアアア！！』

広い海に四人の叫び声が響き渡つた。

しばらく四人が叫んでいると男は欠伸をしてキョロキョロと辺りを見渡した。

「いやゝ…まいった…寝てた」

男の言葉に四人は止まった。そして今度は違う風に叫ぶ。

「寝てただアアア!!??」

「有り得ない。有り得ないですよ…会話の真っ最中につ!!」

銀時と新八は有り得ないと叫びだす。

「凄いネ。会話中に寝れるなんてお前何者」

「良かった…良かった…毒じゃなかったんだ」

神楽は瞳を微かにキラキラ輝かせ、長谷川はホッと息をはいた。

男はそんな四人を見ると呆れた感じに呟いた。

「しかしこの船は騒がしいな」

「「お前のことで騒いでんだよ!!」」

男の言葉に銀時と新八は突っ込んだ。そして、男の素性を聞こうとする。

「はあ…ところであなたは何者なんですか？」

新八が聞くと男は帽子を少し上げた。

「おれは……」

そして口を開いたかと思うとまた顔を俯かせ寝始めた。

「おいしい、まだ寝るんかい!!…ちょ、銀さんどうしましょう」

新八が突っ込むも男は起きる気配が無さそうだ。困った新八は銀時に助けを求めた。銀時は眉を微かに寄せると怠そうに頭を掻く。そしてビシツと携帯パソコンの画面の向こう側の読者様の方を指差す。

「じゃあ、続きは次回に持ち越してことで…次回もちゃんと見るように」

第14訓 炎は危険です（前書き）

お待たせしました。

かなり短めですが、どうぞ

第14訓 炎は危険です

「へえ、エースさんって言うんですか」

新八が前回寝ていた男を見て言った。隣には何故か黒こげの銀時がいる。

実はあのあと、銀時たちは男が起きるのを待った。ひたすら待った。しかし、なかなか起きない。仕方がないので銀時が身体を揺すって起こそうとしたとき、突然男の体が炎に変わったのだ。

もちろん銀時は火だるまになり、新八と長谷川は驚いて叫ぶ、神楽は楽しそうに銀時を指差して笑っていた。

そして今は、その騒ぎで目を覚ました男に名前を聞いたところである。

「で？エースって言ったか？お前何者だ？」

銀時はエースを見据えて言った。するとエースも銀時を見た。

「いや、お前こそ何者だよ。おれの炎で丸こげになってもピンピンしてるなんて」

銀時を見てエースはきっぱりと言う。まあ、それもそうだろう。普通人間が炎に焼かれてピンピンしてるわけがない。しかも綺麗に焼けているのだろう。口からケプツと黒い煙を出すしまつ。

「いやいや、俺から聞いてるんだからお前が答えるのが礼儀だろ」

「銀さん礼儀なんて言葉知ってたんですね」

銀時が腕を組んでいると新八がボソツと呟いた。しかし、話が進まなくなるので銀時は無視をした。

「礼儀……確かにそうだ。けど、名前は名乗ったしなあ」

エースが困ったように首を傾げると神楽がハイハイと元気よく手を上げた。

「質問ネ。さつき銀ちゃんを燃やした炎何アルか？」

「あつ、それは僕も聞きたいです」

神楽の質問に便乗するよう心配も声を上げた。するとエースは帽子をクイツと少し上に上げる。

「ああ、おれはメラメラの実を食った炎人間だからな」

『炎人間ンン!!』

エースが言くと4人は驚いて復唱した。銀時はマジマジとエースを見つめる。

「けど、メラメラの実って言うくらいなら悪魔の実ですよね」

「悪魔の実……銀ちゃんと同じアルか」

新八の言葉に神楽もうんうんと頷いた。すると長谷川が驚きの声をあげる。

「うへえ、銀さんってば悪魔の実食っちゃったのか!？」

「そうよ。ドブドブの実ネ」

「いや、神楽ちゃん。アップアップの実だから」

長谷川と神楽の会話に新八は突っ込みを入れた。するとそれを聞いていたエースが震えていることに気がついた。

「お宅…大丈夫か？」

銀時が心配して近付こうとするとエースは銀時と見据えた。

「アップアップの実って本当か。本当にあの伝説のアップアップの実か？」

エースが驚いたように言ってくると銀時は目をぱちくりとさせた。

「あ、ああ」

「そつか……なあ、お前らは迷子なんだよな。どこまで行きたいんだ？」

銀時が頷くとエースは少し考え込んで聞いた。すると新八がエースを見ながら言った。

「僕たちは…その…この近くにある海軍基地を目指しているんです」

「海軍基地？また変な所目指してんだな。まあ、行き先は同じだし…おれが案内してやる」

エースは腕を組むと海の方こうを見据えて言った。

「え？エースさんも海軍基地に行くんですか？」

新八が聞くとエースは首を振った。

「いや、おれの目的地はその海軍基地の次の島だ」

「そうなんですか。ところで…海軍基地まであと何時間かかるんですか？」

新八はハンド海賊団のことを思い出し聞いた。するとエースはチラッと新八を見る。

「そつだな。速くて…3日と言ったところか」

エースの言葉に銀時たちは顔を見合わせた。

『み、3日もオオオ!!』

エースを除く4人の叫び声が海に響いた。

【教えて、銀ハセンサー！！】

銀八「はい。今日は質問コーナーととっても大事なお話があるから、最後まで見てくれな…それじゃあ、行くぞ。HN、灘さんからの質問です。『銀さん達は海賊にとつて一番何が大切だと思いますか？』と『銀さん達はエースのことをどんな印象とってますか？』だな」（ハガキを読むとポイ捨て）

銀八「はい、お答えしましょう。まず海賊に大切なのはイチゴ牛乳です。敵が攻めてきた？海で迷子になった？ライバル海賊団の船長が実は女で告白されちゃった？大丈夫！！イチゴ牛乳さえ飲めばそんな問題どうとでも」

新八「なるかアアアア！！イチゴ牛乳はそんな万能じゃねえよ！！」

銀八「あ？なんだよ、新八。じゃあ、何が大切なんだよ」

新八「え？……そ、それはやっぱり仲間とかですかね」

銀八「ありきたりでつまらねえな」

神楽「ほんとネ。新八の人生並みにつまらない答えヨ」

新八「ちょ…ちょっとそんなボロクソに言われるほどオオオ！…つか神楽ちゃんいつの間に」

神楽「むさ苦しい男共じゃ華がないから来てやったネ。ありがたく思えよな。つてわけで銀ちゃん。次の質問いくヨロシ」

銀八「はいはい。えっと…エースの印象だろ。そりゃ、もちろんのび太」

新八「え？銀さんのび太って…」

銀八「いや、あいつめちゃくちゃ寝てたし。のび太くん並みだろ」

神楽「ちなみに私は炎と思ってるネ」

新八「……僕は…まあ、不思議な人だと思いました。寝るし炎出すし」

銀八「なるほどな、よし…これで質問も終わったし。大事な話に入るわ」

新八「あつ、そういえば最初に言っていましたね。何ですか？」

神楽「私、分かったネ！！とうとう打ち切りアルな」

銀八「いや、神楽違うから。実は、設定が変わった」

新八&神楽「設定？」

銀八「そう、この小説の設定では銀さんはジャンプにてこのトリップしたワンピース世界を知ってることになってるが、少し変えて江戸のジャンプのワンピース世界とこのトリップのワンピース世界は異なることになった」

神楽「…なんかごちゃごちゃしててよく分からないアル。つまりどういうことアルか？」

銀八「簡単に言うと…銀さんの知ってる知識では、キャラの名前や細かいところが違っていてことらしい」

新八「なるほど…つまり有名なキャラに会っても僕たちは反応しないってことですか？」

銀八「新八正解！！まあ、そういうことだからそれを踏まえて見るように」

第15訓 3日なんてペンが走り去る並に過ぎていく。……ペンって誰だっけ

まず、最初にお知らせ…この救出編終わりましたら、エースと居た3日間を番外編として書きます。

それでは、遅くなりましたがワン魂どうぞ

第15訓 3日なんてベンが走り去る並に過ぎていく。……ベンって誰だっけ？

「海軍基地つばいのが見えたぞ！！」

あれから3日目の早朝、マダオの声が船内に響いた。新八は床に敷かれた布団から飛び起きるとキョロキョロと辺りを見渡し眼鏡をかける。

そして隣でグースカ寝ている銀時とエースを起こそうとした。

「銀さん、エースさん。着いたようですよ……起きてください」

しかし、二人はピクリともしない。熟睡しているようだ。

新八はため息をつくと起こそうと再度二人の身体を揺さぶる。

「二人とも！！起きてください」

すると、運が良かったのだろう。エースが起き上がった。

「おー、眼鏡」

おはようと言った感じで新八に手を上げるエースに新八は突っ込みながら言った。

「おはようございます、エースさん。着いたようですよ……ってか眼鏡じゃねえよ！！」

新八の言葉にエースは欠伸をして頷いた。そんなエースの様子を見ながら新八は言った。

「あの、僕はこれから神楽ちゃん起こしてこなきゃいけないんで銀さんのこと起こしてもらえませんか？」

「分かった、ギントキを起こせばいいんだな」

「はい。よろしくお願いします」

新八はエースの言葉を聞くとドアを開けいそいそと神楽の元へと向かった。

部屋に残されたのはエースと銀時のみ……

エースはとりあえず銀時を見て声をかけた。

「おい、ギントキ。朝だぞ」

しかし、銀時はグースカと寝息を立て起きる気配がない。エースは考え込んだ。そして仕方がないので幼少時代ルフィを起こしていた方法で起こすことにした。その方法とは……

「起きろギントキッ!!」

ゲシツと鈍い音を立てて銀時を蹴った。

銀時の身体は蹴られたせいかゴロゴロと転がり勢いよく部屋の壁にべちゃっとぶつかった。

「う……」

銀時は微かに唸った。エースはそんな銀時を見ると起きたかと近付く。しかし、銀時は少し唸っただけで起きあがろうとしない。

エースは眉を寄せた、そして最後の手段とばかりに腕をボツと炎に変える……そして……

「ギャアアアアッ!!」

しばらくすると銀時の叫び声が船内をこだました。

一方その頃、新八はというと神楽を起こして朝ご飯を作っていた。

「新ハイ、まだアルか？私お腹ぺこぺこヨ」

「神楽ちゃん、もう少しかかるから顔洗ってきなよ」

新八が料理をしながら言うのと神楽は頷いた。そして、顔を洗いに一旦外の方へと出ると目を見開いた。

何故なら近くに細長い見張り台のような建物があったのだ。

海軍基地の見張り台に居る男は眉を寄せた。ある船が真つ直ぐこちらへと向かって来ているのだ。

船の帆を見ると何やら子供が描いた落書きのようなものやら手形、人型などが描かれている。

「あれは……何の船だ？」

男は目をぱちくりとさせた。見れば見るほどよく分からない。男は困った、近づく船について上司に報告をしなければいけないのだが、何の船なのか全く分からないのだ。

男は困ったように、しばらく船を見ていると髪を団子にした女の子が出てきた。

「あー…君は何者だ。ここを海軍基地と知ってきたのか」

男は神楽を見つけるとちようど良かったとばかりに尋ねた。

「お前こそ突然何アルか？人にものを尋ねるときは自分から言うのが大人の常識って銀ちゃん言ってたネ」

神楽は眉を寄せてきっぱりと言った。そんな神楽の様子に男はムツと眉を寄せる……しかし、相手は子供だと思い仕方がなく口を開いた。

「私は、第7班監視隊のヘンディというものだ。君は何者だ？」

男……いや、ヘンディは神楽を見据えると再度尋ねた。しかし、神楽は首を傾げる。

「ヘン、タイ……アルか？」

「違うッ！！ヘンディだ、ヘンディ！！ヘンタイなどではない！！」

神楽の言葉にヘンディは声を高々にして言った。そして、しばらく

するともう一度尋ねてきた。

「で、君は何者なんだ？」

「教えないアル」

「何故だー！」

神楽はヘンディの言葉にきっぱりと言ったヘンディは眉を寄せて聞く。すると神楽目を細めた。

「知らないヘンタイに教えちゃいけないって銀ちゃん言ってたネ」

「ちょっと待てー！！それは知らない人で良いだろー！！ってかさつきからヘンタイヘンタイって私はヘンディだああー！！」

「うるせえな。朝からヘンタイヘンタイって……お宅、誰？」

ヘンディが叫ぶとたるそうにガシガシ頭を掻きながら所々焦げた銀時がドアから出てきた。そして近くの見張り台から此方を見て叫んでいるヘンディを見て首を傾げた。

ヘンディは新しく出てきた人物を見るとゴホンツと咳払いをした。

「私は、第7班監視隊のヘンディというものだ。間違ってもヘンタイではない。ヘンディだ。ヘン……ぐふあっ」

「しつけエエー！！一回名前言えば分かったよッ！！」

ヘンディは気合いを入れて何度も自己紹介をした。しかし、何度も自己紹介するのがうざかったのだろっ……銀時は近くにあったトイ

レのブラシをヘンディの顔目掛けて投げつけた。

「き、貴様アアア！！人の自己紹介中によりにもよって便器ブラシを投げるとは無礼では……ッ！！」

ヘンディはブラシの当たった頬を押さえながら叫んだ。

そして文句を言おうとして口を開いたがそのまま止まった。

何故なら銀時から黒々としたオーラが漂っていたからだ。

「無礼だア？俺はな、朝から何故か火に炙られて、火を消そうと慌てて鍋ん中に顔を突っ込んだら熱湯で、味噌汁が台無しになるでしょう！！って新八に怒られ……いざご飯を食べれると思ったら外でヘンタイヘンタイうるさいのなんとかしてから食べて下さいって言われるし、全てお前のせいじゃねえ？銀さんの爽やかな朝どうしてくれんの？」

「え？ちょ……確かにうるさかったのは私のせいだが、それ以外は君の落ち度……ちょっとそこのお嬢ちゃん！！フオローをフオって居ねエエエ！！」

ヘンディは黒々としたオーラを漂わせて近付いてくる銀時に怯えた。明らかに理不尽なことを言いながら近づく銀時をなんとかしてもらおうとするが、神楽は銀時の『ご飯を食べれる』という言葉が出た瞬間船内へと急いで戻っていった。

「ちょ……ま、待って……ほんと……ほんと私が悪かつ……ひっギヤアアアアアアアアッ！！」

ヘンディは謝ろうとするも既に遅く銀時は脚力でヘンディの見張り台まで飛び目の前に立った。

そして、それからすぐにヘンディの苦痛の叫び声が聞こえ始めた。

第16訓 作戦は成功するとは限らない（前書き）

なんか分かり辛いかもしれません…

そして、相変わらず更新遅くて申し訳ないです

第16訓 作戦は成功するとは限らない

銀時がヘンデイ苛めを終えて、ご飯を食べに船内に戻ると何故かエースの姿が見あたらなかった。

「あれ？あいつは？」

「エースさんですか？エースさんなら行きました」

「銀ちゃガツガツんにモグモグよろしハグハグく言ってズズズツたネ」

銀時が問いかけると新八と神楽が答えた。神楽は朝ご飯を頬張りながらしゃべっているの、一見何を言ってるのか分かり辛いが……どうやら、エースは銀時によくと言っていらしい。

「神楽！！何言ってるのかわかんねえよ。口に食べ物ある時はしゃべっちゃダメってお母さん言ったでしょ！！」

「うるさいネ。後妻のくせに母親気取りアルか？私、お前を母親だなんて認めてない」

銀時が注意すると神楽もきっぱりと言った。朝から嫁と義娘の愛憎劇場が始まりそうである。

「ちょ、二人とも……何始める気ですか！！朝から昼ドラやる気ですか！！」

新八が二人の間に割り込んできた。すると銀時と神楽はつまらなそうに朝ご飯を食べながら新八にグチグチ言い出した。

「オイオイ、ノリがわりいな」

「本当ヨ。空気読んで欲しいアル」

「「これだから新一になれないんだ／なれないアル」」

「待てエエエ！！新一にどうやってもなれねえよ。名前だから！！
つてか八の何が悪いんだアアアアア！！」

二人の言葉に新八は叫んだ。しかし銀時も神楽もそんなこと知ったことないと言った感じでズズズと味噌汁を啜った。

新八は二人の様子に額に青筋が浮かぶ。しかし、ここで怒っては相手の思うツボである。それに小説がいつまでも先に進まない。ここは新八が冷静に対処するしかないのだ。もちろん小説のために……。

新八は深呼吸をした。そして、二人を見つめると真っ白な紙を出した。

「そういえば、エースさんが去り際にもう一度会えるようにとこれを渡してくれたんですけど」

新八の出した紙を銀時はモグモグと口を動かしながら見つめた。紙は真っ白で何も書かれてない。そして何故か微かに動いてるように見える。きつと神楽が暴れて近くの壁に穴が開き、そこから隙間風でも吹いてるんだろう。

銀時はそう思うと新八から紙を受け取った。

「真っ白な紙つてのは大体アレじゃねえ？あぶり出しとかじゃねえの。あいつ炎だしよオ」

銀時はそういうとクンクンと紙に鼻を近付けて匂いを嗅いだ。あぶり出しなら、紙からそれっぽい匂いがするはずである。しかし、その紙にはそんな匂いはしなかった。

（あ？あぶり出しじゃねえのか？）

銀時は眉間にシワを寄せるが、今考えてもよく分からないので紙を懐へとしまった。

「まあ、あれだ。とりあえず先に済ませることやるぞ」

「そうですね。早くしないと……大変なことになってしまいかもしれませんし」

銀時が言つと新八もコクンつと頷いた。やはりハンド海賊団が心配なのだろう。

「ああ、早く昼飯は何を食うか決めないとな」

「銀ちゃん！！私チャーハンが良いネ」

「チャーハンか……銀さんはパフェが良いな。新八はどうだ？」

「あつ、僕もチャーハンで……って待てやお前らアアアアア！！」

ほのぼのと昼飯のメニューについて話出す銀時と神楽にノリ突っ込みをする新八。そんな新八に銀時と神楽は顔を見合わせ不思議そう

に首を傾げた。

「何怒ってんだ？」

「昼飯じゃなくて夕飯会議の方が良かったアルか？」

「そうですね、夕飯のほうが……って違いますよ！！あんたら何で僕達がここに來たのか忘れたのかよッ！！」

新八の怒鳴り声に二人は考えた。そして、ポンと手を叩くと同時に答えた。

「「ヘンディ弄りノアル」」

「ちげえだろオオオオオ！！僕達は海軍に捕まったハンド海賊団を助けに來たんでしょうが！！何？ヘンディさん苛めるのそんなに氣に入っただの！？」

「「うん」」

「領くなアアアア！！すいませーん！！ヘンディさんマジすいませーん！！」

二人の言葉を聞くと新八はドアを開けて見張り塔にいるヘンディに謝った。もちろんそんな新八を見てヘンディは怯えたそうだ。

しばらくすると新八も落ち着き銀時は仕切り直すようにゴホンと咳払いをした。

「まあ、冗談はさておきどうやって海軍基地に乗り込むかだが……なんか良い案はあるか？」

「はい」

銀時の言葉に神楽は元気よく手を上げた。そして、元気よく喋り出す。

「食べ物に変装するのはどうアルか？みんな気にしないネ」

「いや、食べ物が動いてたら変だから……ってかどうやっても変装出来ないから」

神楽の無邪気な案を新八はきっぱりと否定した。そんな新八に神楽はムスウっと頬を膨らました。しかし、銀時の言葉に嬉しそうに頷く。

「気にしない……そうだな。そうするか」

「銀ちゃん！！食べ物に変装するの賛成アルな」

「銀さん！！正気ですか？食べ物とかどうやって……」

銀時は二人の様子を見ると違う違うと首を振った。そして、海軍基地への侵入作戦を話し始める。

銀時を含む三人は作戦を実行するため、外に出た。そして見張り塔のヘンディに話しかける。

「おい、ヘンタイちよつと出てこい」

「あ、あの………すみません…私はヘンタイじゃなく、ヘンディ………いや、何でもないです」

銀時に呼ばれてヘンディは見張り塔の扉から怯えながら出てきた。何故か身体中傷だらけで喋り方も変わっているように見える。きつと銀時の八つ当たりが影響しているであろう。ヘンディは怯えた様子で三人を見渡した。

「それで、私に何のようでしょうか……」

ヘンディが聞くと銀時がずいっと、前に出てきた。

「あのよオ、俺達海軍に入隊体験したいんだけど」

銀時の言葉にヘンディは目を真ん丸くした。

（入隊体験？この男は何を言ってるんだ？）

ヘンディはそう思ったが先ほど食らった八つ当たりを思い出し震え

た。そして下手なことは言えないとゴクリと唾を飲み込んだ。

「あ、あの入隊体験は……」

『いいですぜイ』

ヘンデイが入隊体験はやっていないと言おうとしたとき、とつぜんでんでん虫が喋りだした。どうやら、通信が出来る状態になっているようだ。

「ちよつ、隊長！何言ってるんですか？」

『いいじゃねえですかイ。面白そうでさア』

ヘンデイが慌ててでんでん虫に話しかける。しかし、でんでん虫の向こうにいる相手は心底楽しそうに言っている。

それを見ながら万事屋の三人はコソコソと話し始めた。

「ぎ、銀さん……なんかすごい聞き覚えのある声したんですけど」

「……あー、きつと中身の人と同じなんだろうよ」

「銀ちゃん、あのでんでん虫の喋り方がム力つく奴そっくりネ」

「きつとこの海軍基地のでんでん虫は皆あんな喋り方なんだ」

新八と神楽の問いに銀時は適当に答えながら汗を流し始めた。なんだか嫌な予感がするのだ。

『それじゃあ、きちんと案内しろよヘンタイ。そしてダンスの隅に足の小指ぶつけて死ね土方コノヤロー』

言いたい事を言うだけ言って通信はブツツンと切れた。

新八と神楽は通信の最後の言葉を聞くと銀時をじっと見つめた。

「銀さん今の……」

「銀ちゃんあれって……」

二人から視線を受けて銀時は苦笑いを浮かべた。もし、あの人物がこの海軍基地に居るのならこの入隊体験作戦は失敗かもしれない。

「それじゃあ、話はついたんで船を進めて下さい」

ヘンディの疲れたように言う言葉に銀時たちは遠くに見える海軍基地がまるで地獄への入り口のように見えた。

第17訓 可愛さ余って憎さ……（前書き）

久しぶりの更新です！！

展開が急に過ぎてもしかしたらついていけないかも……

第17訓 可愛さ余って憎さ……

銀時の作戦により、入隊体験として海軍基地に入った銀時たちは……地下牢に閉じこめられていた。

「いやいやいや、閉じこめられていたじゃないから！！なんで牢屋アアア！！」

新八は牢屋の格子を両手で掴み叫んだ。どうやらこの牢屋は海楼石のような物質で出来ているため、銀時はぐったりしているようだ。もちろん銀時は何故自分の力がこんなに抜けるのか分からず混乱し、神楽は心配そうに銀時を見つめていた。

「し、新ハイ……銀ちゃんどうしちゃったアルか？ってかなんで私たちこんな目にあってるネ」

神楽は不安そうに尋ねた。そんな神楽に新八は分からないといった風に首を振る。

そう、実際に何故自分たちがここにいるかは例え回想をしたとしても分からないのだ。

何故なら銀時たちはまだ何もしていない。なのに、船から降りた瞬間この地下牢へと連れてこられたのだ。

最初はハンド海賊団を助けにきたことがバレたのかと思ったが、何故かお茶と茶菓子置いて地下牢から出て行く下っ端海軍たちを見てそれは違うのではないかと考え、しばらく様子を見ることにしたのだ。

だが、様子を見ることにしたのはいいが……だんだんと銀時の様子が可笑しいことに気付き、焦りだして今に至るということだ。

「もう嫌アル！！私この格子壊して出てもいいアルか？」

我慢の限界が来たのだろう神楽は銀時のそばから離れると閉じこめられた牢屋の格子を睨み付けた。

「ま、待つて神楽ちゃん。もう少し、もう少し待つてみよう」

「新八……けど」

新八の言葉を聞き神楽は銀時を見つめた。そう、神楽は銀時が心配で心配でたまらないのだ。

新八も銀時が心配なのだが、銀時自身がまだ待つようと新八に目で訴えてくるので仕方がない。

しかし、新八もそろそろ心配度が限界である。銀時の目線に気付かない振りをして牢屋の格子を壊してしまおうかと思い始めた頃、誰かが地下へと降りてくる足音が聞こえた。

新八はゴクリつと唾を飲み込み降りてくる人物を待った。神楽も銀時を守るためと再度銀時のそばへ行く。

コツッコツッ……足音はだんだんと大きくなり、人影が見えた。

「旦那方、お久しぶりでさア」

その人物は友好的に三人にというよりも銀時に向かって手をあげた。

「沖田さんっ!!」

「サドッ!!」

「っ!!」

出てきた人物に驚く三人。

いや、前回の終わりから予想は出来ていたが……万事屋三人は信じ
たくなかったのだ。あのサド王子がこの世界にいるだなんてー
だが、相手が目の前に出てきてしまった以上、もう現実逃避は出来
ない。

「沖田さん……なんでここに？」

新八は聞きたくはないが、聞かないといつまでたつても先に進まな
いので、聞いた。

すると沖田は何かを思い出すように顎に手をあて話します。

「あれは、夜間の巡回中の時でした。俺はいつものようにサボっ
…じゃねえや真面目に巡回しようとかぶき町に向かっていやした。
その途中にふと、男と女の争う声がしたんでさア」

「もう、いい加減にして下さい!!私は何んと言おうとそんな意味
深な指輪なんて受け取れません!!」

女は目の前の男をキツと睨んだ。街灯の明かりに照らされた女の顔は整っており、睨んだ顔もとても魅力的だった。

一方男はというとむさ苦しい長い髭に白い髪。とりあえずむさ苦しかった。

「そ、そんな……リサちゃん。そんなこと言わないで考え直して」

男はしつこいくらい女にすがりついた。しかし、女は心底うざそうに眉を寄せる。そして冷たい声を出した。

「ホント、いい加減にして頂けませんか？警察呼びますよ」

「っ！ーリ、リサちゃん！ーじゃあ、じゃあ、今まで僕に優しい笑顔を向けていたのはなんだったんだ！ー」

男は女を見ると悲痛の叫びをあげた。そんな男に女はにつこりと笑う。男はそれを見て微かな期待をした。

「そんなの私がキヤバ嬢だからに決まってるじゃないですか。金がかかってない限りあなたのような男、話すのも嫌ですよ」

女の言葉を聞くと男は絶望へと叩き落とされたのだろう、地面へと膝をついた。女はそんな男を見ると鼻で笑い立ち去ろうとした。

しかし、立ち去る前に男が憎しみと悲しみ、そして絶望に満ちた声をあげる。

「おのれおのれおのれエエエ！ーこの洞爺湖仙人をここまで愚弄するとはアアア！ー」

男は女に向かつてどこから出したのか杖を振り上げた。杖の先はなぜか光っている。

バレないよう近くで隠れて見ていた沖田は目を見開いた。あれはあれはヤバいと本能が伝えている。

沖田が考えるよりも早く女と男の間に割って入った。沖田の身体を光が包んだ。

「そして、気付いたらこの建物に居たんでちよっくら乗っ取らせて貰ったわけでさア」

沖田の語る言葉に万事屋三人は目をまんまるくして驚く。

「『あ、あのエロ仙人何してんだアアア!!』」

そして、盛大に叫ぶよう突っ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0080r/>

ワン魂（ワンピース＆銀魂）

2012年1月12日15時47分発行